金毒流涎曲神鏡

月

特57
558

256
291

特57
558

金春流謠曲袖読

月之巻

明治
45. 2. 22
内交

大会	二十三
放生河	二十六
左右右	三十一
楊貴妃	三十六
山姥	四十一
雲	四十八
富士山	五十三
生田	五十八
生霊	六十三
邯鄲	六十七
黒塚	七十一
嵐山	七十六
巴	七十九
六浦	八十四
安宅	八十八
春栄	九十六
岩船	百一
頼政	百五
定家	百十一
自然居士	百十七

海人　百三十四
金札　百三十一
威久　百三十五
井筒　百四十三
女郎花　百四十七
叡山石　百五十三
東方朔　百五十八
七騎落　百六十一
菖蒲城　百六十七
望月　百七十三
善光寺　百七十八
吳服　百八十三
板下信　百八十八
清水　百九十四
初雪　百九十八
昭君　二百
鵜飼　二百五
岩永　二百十
羅生門　二百五
錦木　二百十一
谷行　二百十七
氷室　二百十四
橋姫　二百九
百姥　二百三
富士太鼓　二百八
和泉式部　二百五十二

淡路

淡路の國のとりめすやく淡路の神代なりけり

抑是を當今に仕る所願のよ和歌のよ和歌

住吉の淡路島まで仕てみよきあるよ

是淡路の國のわたりて神代の

古歌なりとも

紀の海や波ぬとの海風まくに紀をさう

紀の沖津あ波の程なくうつり来てよそ

みすよ鴻のけや法師ろみをそ

なりくる多程よ是ぬそや法師國よ

若そと所の人なおまち北の渭とをれ

うすりそと神の代を歌を弾く

海山の長國き波のおそち海程を

淡

ゆさめ国ゐれハ苗代水を豊なり
大海湯の神代より今人の代まで
迄山河草木國土を皆神代恵たまひ
田あゐ堀を開て千里万里のかまて
を皆集る時と雨降更よ雨も
降ちる御国初めて神代より受たる民
を豊なる天の村ゐ稲穂荷て万家
乃秋を待とゆ切頃を今ハ出来な
まて心の池のいとくさ春ハ雪も根
に芽とかの田を人ゐ仕をて秋ハ品く
花ゐ色をたくさなるも実りなしくれく
苗代の水ゐ心の種まきて ちれハ雨も
ゆ稚田雲ゐをくしくきれく
いとゐ是なる雨ゐ降ゐくゐまありおと

れ風情を見たる小田をとくなくゐ
口ゐくくを主ゐ御ゐ信心のきなり
いとゐ成是を御神田ゐく作ゐ さんれ
主の田をくんをれ萬祝事れ稲
ゐあれ水ゐ五千串をて五千のをて
をを神をとりを作ゐ姫是ハ成歌
に谷ゐををく水口ゐいてゐて苗代
小田乃種荷ゐくり其上御御田を苗社
二宮の仕借田ゐくれ初ゐ御ゐハ国ゐ法御
をて御田ゐ作ゐれゐ 御ハ當社ハ二宮ゐく
御まさハ国の一宮をくくをてまり国を
をゆ若ゆくりれ権現をて座れ座ん
恐なくゐくれ心清れをゐ苗社ハ二の
宮をて御まをハをて国中二の次第に

注

二

あるしるや 伊勢ふく當社の神饌所の
社は殿なるは 二りの宮居を共使して
二宮と崇めまつるなり 是則いさなき
いさなみの尊に二柱坐神代のまく宮居
殿は法治國の神八一宮の宮居ふるりの
二宮と崇めまつるも 実に国の有るかや
掛く新る国に種を蒔くるに恩徳
唯是神代ちよのう事 新き法治の
国も世界や万物の出生者は神徳共
出生神のちゑなり 然は渾けし
天地のいさなぎとまては 種まくとよみ
いさなをもては 種を納む 是目前の
序ちゑなり 其上神代も遠のく久
今目おのを 伊勢ふく るわをまき

種を蒔さるく當代のしくみ
ふくまく春雨の天よりふるるねまて
て国ちゑ豊ふ千里さるまて とくさ
乃村をに秋なるるくは種を納めん
神徳あるを能の誓ひ安なはく有難
のちゑなや 野く當社の神秘意ふ
まちく 祈むちゑにやとくするて
天天地開闢のすくより混沌まる
新るれく清くはるくるは天とあり
おるとくみてれ彩を地となるるや
然をて天ふ五行の神まし常すに必
金水是なり 兎陰陽は別まて本当
土の精いさなきとあり 生あの精出
るまくいさなみと顕て 然れる

未世界ともなりてはきとしいきれば
といひ　國土をさまりまはしめ出生をれ
所をいさなとまりはしめ即ち法師の國を
始をまりそれより二柱の五神はじめ多
鳴とまうすも此一島の事なりとよ　おらの島
地鳴をもつて大八洲の國を造り紀の
國伊勢志摩日向五の四の海岸を化
出　日神月神蛭子素盞嗚尊　地神五代の始めて皆此修法出現
中みそ皇孫八日向の國みはまくこと
結びく城神西の宮見に法を出
生　實有雖き代くとも　天下を保ち法の
事　すくく八十三万六千八百餘歳なり
かくの日出きを五ゆくちよ佛代をひり

その樣現を所きてまいりさんのきく
いさなとこの神代を品今の國土なること
實神の代のなすこと　今をぬ
秋津洲の君のこゝろ有雖き　佛影
ろと夕日くれの雲の塔みたなびく天
のうき橋のうつを顯くに婦人
をなくさめん　うそうき橋のいと
ときくをいなるこの樣の　其神の
らをの　ろ黒數を　ふれすま
すすひさめよ法のよ花の歌のさ樣
きく　神をを今を白波の法師山を
渉橋みく天のをとろり生ろ
く　文今をも神の姫のく佛来
をわくなりとゝ八屋ちを神乎

の月みきこえて光さしきそきて乃
らくなりくるや新色をあらくなりくる
ほとゝぎすのかきつばたを世に白めを波も
てあくる法師名月春の夜もまたなる
緑のかをまみわくに天に浦橋の下
みくくハ湖の国をこゝろ得ぬ伊勢海
の神とハ和事なり治まるや国常立の
をしめり七ちのの神の代ハ
まを今を君代代ゝり和光寺護法の
技業ハ国風を收るも山ハ新をし
実をくきこゝろ〳〵拝天に浦橋の
甚御所ハさしてをいなる所なる浦
ゝさけ詳にきゝて雲潟〳〵潟と
なゝゝと法路を見つゝ立ゝ浦

橋のなゝん実に潟に有れ西を
海湾くゝて南ハ雲鄙をたゝね
宮殿ゝかゝる浦をを立ゝ春の雪
の神をしをゝ手ハなゝをひゝ
潮を附律風治ゝゝ波のあ原の
国富氏をゆゝに万家を湖のまの琴
千秋の徳ハ名治ゝる国をひゝき
をゝ国ゝ久ゝき

知章

ワキ次第 雲を心の末遠く くもらぬ秋の
月出る 詞 是ハ筑紫彦山より出たる僧
にて候 我いまだ都を見ず候程に 唯今
都へ上り候 又よき序なれば 須磨明石を
も一見せばやと存候 末行とも雲の波
沖津船影も浮世の道も遠し いりさと
その海原やうなる関に着にけり
く旅の船影もいつくとも知らぬ浦
に船をとどめ 山を越え人にて 津国須
磨の浦とかや 又是なる磯辺
を見れば 亡き人の年経し墓と
おぼしくて 要文書きし卒都婆に知章と
かかれたり 知章とは一門中にても

誰ともなく、まことにあるべきやうにて、
のうく侍僧ハ行ひを伝へて、さんゐ
是をあるべきことを入まゐ、平れ知章ハ
かくて行ひすまして、ひ吊ひよれ
武蔵寺知章ハ世谷みく討まゐ其合
戦ハ三年ばかりまゐ二月七日午ハ又武蔵
国七百あれハ知縁のく芸今朝の間に
立ぬきるまゐ一樹のうけて
なるまゐ一河の流をとゞまるも皆色他生
芸縁なり遠国のくすて由まゐ世
ともなつ色なるより結して一遍の
念仏をも回向を結ぶの有難さ
結ぶ吊ひくく、ゐ作のごとく他生
の縁芸あまねるうに伝初るゝ家な

ゐくく芸縁の利益をなして事ようや
念ひの縁芸数なりて、吊ひとよ
されきゝよ　一見章都婆永離三悪
道何況造立者現生安楽国物故平れ知
章ハ筆正覚　昨日ハ人ゐくく市ゐい
知ともゐ男ゐ弓馬れ家人ゐ
ハ法ゐひれ仏異ゐいう結ぶ吊ひ
一念の功力ゐくく三悪ハ罪ハ消ぬ
今一増てぬるも近く法の道れ
芸七結を遠縁もなるゐ結ぶき
くゐ国も知章と一所ゐて
結ひてひり　さんゐ一度ゐくく結ぶ
今ゐ一切ゐ是武蔵寺近ゐゐ
親ゐなゐけ芸ゐ討まゐ

又知盛ハ二十余町の沖まゝ大
臣殿の御舟を近付たてまつらんとし
給へとも追ハ小舟を引出てさしつめ
いや馬とつくもし みのつく黒とて
宗盛の名馬なり 是を二十余町
海の面を昼こと泳き渡り ぬを
たてまつりつるもの 新中納
なりつる 是を追つかまへつる武馬ぬ
のおもを乗つと見て 沖の方を白し
高嶮を見掛 くたつり名を富
類と 名を付 名を付
乗り 越島南北巣をとけ 胡馬小風を
吹 も回ぬを偽 胡馬
小風を 馬ハ西を行 船の纜

繋られても行 とかゝ
去ぬ日もとや 須磨浦海を
乃 宿り とく 逆縁 とく
とく 実る 我 も 食 人
を 門の 西の 通 夕月の 仮 世の
国 とし 行 も 門 西 と ハ
名なる 人 今ハ 行 つ み
の て 住 世 名ハ
ハ 乗 ハ 見 浦
里 野 山 ゆ て 行 の
を 行田 の 浦 沉 村
見 ま 背 影 失
ろ 影 失 と
る 弥 生 ひ や

殿さんとゆの波千鳥さも舟くく
所を須磨の浦つゝひ塩山芝風を活
くりあるもちゝの衣手を彼浄経を
讀誦千部法華経を讀誦をふあゝ
み雅の弔ひ申れ都帰屋通れ若し見
芝塔ちきらてくそもを妃見なる
有難さよゝゝくき活身体や活れ浦
海をこゝ所の色ひ紙のこゝろ山風
上野の嵐苔木国七や有情非情を
悪皆成仏の彼岸の海隆ゝ活ひ
を雅さよゝゝきゝ所ちさも禮ら若武
者の活なくくゝ見活ひ必なる人
まて海おゝゝ誰ちなるやゝゝ
てやゝ弔ひの有難さ知章見まて

まりなを摂平家の公達を見下り
見なる事ゝと昔よりくゝ活の
ゝて織地の直垂ゝつちゝひ芝選をて
さも禮ちるゝよそちひ所をさゝら
須磨の浦よ朧なるかりは姿や月れ
ちくゝりを絵鴻の島ゝれ行船
を切ゝて思ひ和ゝ歌ゝ
の跡ゝ波をなりゝやゝ
絵ゝ活刀を捨て西海のをゝ
なゝ浦芝活重ねてゝ活く
ゝ和を共時の名野活ゝつけて活
名のゝ立田の山芝ゝ紅葉の紅廉く
旗芝ゝ散ゝなるけきくく主上
二位殿を始り大臣殿公卿一門皆

船にも乗らず海上にて漂ひ唯蒼波の
うきぬ浮沈む水鳥のごとし　其中に
親子にて新中納言知章監物太郎御
座船をうかひ汀に打出させし所
敵手しけくかゝりし間又打物の打合に
程に知章監物太郎主従寄せてうち死
す　其後知盛ハ二十餘町の沖に
乗られたる大臣殿の御船迄馬を泳がす
追付く御舟に乗うつりたまひ命助
かり給ふ　知盛其時大臣殿の御前
に参り涙をなかし宣く武蔵守もうて
きぬ監物太郎頼方もあの汀にてう
たるを見捨て是まて参る事面目も
なき次第なりいかなれハ子ハ親の為めい
のちをしまぬこゝろなるにいかなる親なれハ
子のうたるゝを見捨ん命ハをしきもの
なりけりとてさめ〴〵と泣給へハ餘所の袖
を濡し給ふ大臣殿も宣く武蔵守ハ手
ともに心も剛にてよき大将とみし
そとて右衛門督の御方を見やりて
御涙をなかし給へハ船中にありつれ
まじる人々ハ鎧の袖を濡らしけり　武蔵
守知章ハ生年二八にてはかなくなりぬ左手
の猶も同年にて若葉の別
松千代をともにて栄行や田宮桜をも
花ね川一門ともに双否小今年の
冬のかたなき所も須磨の山桜花
木となりぬ　埋木の花さて深き船人となり
十

行てそうぶつ寺にきゐる杖の
門ゑ伊家期を懺悔ゑくり行く
屋 宮寺宗紀の和野を慚愧懺悔
ゑ影 修羅乙巳苦惠あぬるれん
ゑ修羅道の苦しみの無一念を宗
期ゑ 苦りまゑの敵ゑて そハ
やゑをゑ 浦の浪ゑ團扇の猶ハ見
ゑ堂ゑ ゑ ゑ 笠ゑ郎ゑ
敵ゑ 矢ゑ 敵の猶ゑの頭の骨崑ゑ
に対ゑをく真逆ゑ ゑ ゑ ゑ
言人ゑ ゑ ゑ 新ゑ納言と同
ゑけてゑきゑ ゑ ゑ 刑を釈ゑ
なゑ ゑ 和尊ゑ ゑ ゑ ゑ
ゑんてゑゑ ゑ ゑ 押ゑ頭捲

ゑ起ゑ刑を敵の郎ゑ
ゑ和尊ゑ頭ゑ ゑ ゑ
て討ゑ 其修羅の業ゑ沉ゑを
思ゑ ゑ 僧の吊ゑを 経ゑ是ゑ
寒の法ゑ ゑ ゑ 成ゑ
ゑ跡ゑ ゑ ゑ 亡跡ゑ ゑ
なゑ ゑ ゑ

千手

第男

是は鎌倉殿の御内に仕へ侍野分宗茂と云ふ人相國に仕へる三位の中將重衡卿を因人となし奉り給ふ此重衡卿は白河を基盛と申し奉りし平家の公卿にて相國に事の外に寵愛なりし人なり父母に寵愛一門の覚既ひなき人なり御子に御子に御子世の事なり明日も御湯殿せんと千手に前を遣され今宵は参せ申されば此千手に前は手越の長者なれば優なやさしくして所なしつくしを頼朝より遣されし事定有難き心さし

みくにきこえ又雨降ぬつまくれは行る
酒をすすめやさとを有作 琴の音
おくそくれとはるくくおもや四河
なるらん 大春の如れ樹頭は栄え
秋の月れ水底を深くも世れとなる
さのそ秋行れくくて長安重衡れ
其ふるさ雲のとりけてもきぬ月
のれ月浪よりひるるれさくい
よるくの俗而ふて所ふる海る
恨てれ 知ることをめぬは涙
ふるとさりやとれちみくのきのみ
ることぬ雨れ音くく降すさひるれ
折をいおしの露もちもくふ
ことれもきりくときるる袖

の袂おくそくれ夕ぬたるの郭く
いる誰ら所入ん 誰みくるるいそ
やふまれ前の江寄りて作 寄り
なるるぬ所くそれなはあちらく
江桃梅を以披露よりく 重衡静 外い
昨花一日の栄命い蜂蝶れ定めるか
こて似なと心い藤武ら胡国を因れ
岩屋の中をこめくれて君邊と忘
きぬこるきくそれい楊李ら謀て
敵をるるる 舊里を還るるれも
いりをなく敵陣をおめくまくく
縁他の責をらくるきこと今日もや
限りふくんあくく定めるやいん
やとんちまれ前のまるるきてた

何ぞ千手の前、相思ふ人に何の為みく
ぬく何の為ありたきまみ尉面
ハ叶ふまい由いひく〳〵ひく〳〵畏
こんいに千手の前涙ぐみよ
披露ひてくハ何を思ひやんきの
の所尉面ハかゝまい由仰きれこと
是ハ此の外ふ仰られこなも私ふ恥す
面の中を慰めやとと頼朝より
仰ふて琵琶箏おをて参たを
由心得く所仰くさ〳〵ハ其面
かゝ和てやく〳〵清盛の越千手
前ふ申てくハ是を私ふあ〳〵
雨の中ハ慰めやとの頼朝ふも
の仰みく琵琶箏をもて参う

よく〳〵所憚ハさ和事なをもたく
此ふ仰を請をれを其時千手を
ひく〳〵妻戸をこそりやを押ひく
翠簾の地風白ひ乱る花の都人ハ
愧なく知ふえんこそや音曲の
孫まく〳〵人思心のおくふさ其情
こそ〳〵やこなを為ハ書ををちひ秘
たう思ひてやをりぬん
千手の前きのあ〳〵ふ涙ふたり
出家の暇の事問まちこと
そらく其由ひてくハ賢ハ胴敵の
所事なを和たかりをめに頼りや
ふ〳〵私ふて出家を願やさん
ふ仰ひもよく〳〵とこそ仰ひう

十四

妄を心の中に推量するにいはく
あるべきとも覚えてこそさまざま
ひとりぬる家の内をうかがひ
口惜や我一人ながらいつもなく
きみに生捕まるのちは面をさらし
のこなしに今又吾妻に別るるもあり
和をさすお世のむくいとは
なるべしと思ひしも命のうち仏像
を立て人寿を断ず現当二罪を
さらしめ前業のりを和らぐべく
宮ゝ異ハ理りうるかる例を
ひく今は参きるひと同抱をしらと
な歌きるのうことよ 変化感ぜるに
此類ハあるべし 其易に別ハ紅の

花やさうえ きみハあつまの春ハすくく
物をうつまるに 身に積を
世ハ是蝉のかゝ私ぐさの 別の
つゆ ゆるる紅の 雲井を上結をさる
くきゆる 拙をそうなるおとろくべし
深所の 別てうなる水行けれハ橋
や物手ハ拙ぬ思くるるけぬなるけ
の中ゝなるや恨をなるゝ
今旦の雨中に夕景をつまくべ
慰めんと 拙を抱きて寄りて 既酒
妻をとらんとて 千手も 丸面
丸手ゝも 酌ゝ 童衡に
こう寄りきれ 今いかりしら怪に
心なるにゝ 手先きるを

乃心ひそかに思ひ惑ひ、それくいろに
何ゝをもかさねをもとゝのへ
甚だ千手観音に願ひ結び童子なる
情なき事を嘆ぬる姫むすめ只今御
所朝顔ハ新くを小野の御化粧を
詠る風くをも寄くしと思ひ
ひなり　さりなゝ重衡ハ今を世
なゝ唯世世に便ゝ風かまりきれ
と宣くハ　妾御を取り十悪とい
ともう接をと　朝顔てう曲て
きを彼重衡を相国に事の
なりをとも　兄弟を情を一門も
起て父母の命を張り　ものされ
時ゝり平家の運命尽く月の

夜ゝ嘆ゝ　時や男唐に素国
乃生田河を身を捨く訪ゝかを
やせゝ　妾の御本家に落
されをゝ　気ちを　今接ちよ
力なゝ重衡をひゝとゝに御
を国を罪ゝるゝて世に憂る
流鯉の生捕をゝ河越に義房ゝ
手ゝ　ゝ心れの都入言や帯ハ
定めゝれ神月時為隆ゝ
極る流後の手ゝるゝ
かゝもゝて又語ゝ流ゝ
ゝハ御ゝて八幡の雲ゝ
又ゝ河ゝくゝや遠に見掛箱根ゝ
ゝく明ゝや　ゝ星月夜猪倉山

よ入しくんら見限りそ世を思ひしまなる
きはるもきのひ好る哀れをとを
つまの灯くくくてハ敷り虞氏う
泪の雨さくきさるあの古方四面る楚
歌の聲ひしちり何ところ見ひきひ軸
思ひの多るやゆめん源をくく
めくくひを雲ひぬるえひ桂てなる毛
さくふまひ軸ものるは雲ひているやるをん
忘をめや一樹の陰を一河ひ水皆
是他生のえんといふ古拍子ひ
えひきを重衡奥ふ幸く
琵琶をとりよせ弾ひ又弾ハ又弾ひ
絃合をあるせて関ハ歳の紅色
ひおたり夏ひ枕の短夜のえ行

十

十七

蓋も祝なく晴晨を天明ひ明りるひ
をの清あるをなるあくき清あるや
なるまんや酒宴をあ弾ふ古行の
ちをいたちおうくて重衡動ふ
よりくく又敷るとあり名就七寺
護山弾くの千年も浄をたちいく
何中ひうと契りやきぬくふ
にをたる軸をそとの霧源寒
ふをたる軸をそとの霧源寒
重衡の有様目もあてられぬ
さられく

元禄元年

西行桜

此侍従なる花見用くに就て書そ
長閑き　旬　是ハ上京邊の住居其
者ゑく作り元春なりしハ春の
しるの花をあるゐさなるゝ山野ゑ
雲しきのふハ東山地之のとれを
眺めていけふ西山あれ住宅
の花今を盛なる中ゝ程ゑ用
心其友をさそひ唯今西山あれ住
宅へと名ひ　三人　百千鳥さくらるる
花ともにくあしくまりゆく旦那
くにも孫生の宅をれ花ゑ当まり
て花の友　三月　知るもとるゐを　サルヲエ　なく
く注も花なる心りれく　サ行侍　未　友まよ

花へ上求菩提の横雲晴れ秋の月
ハト化迷衆の水を分て誰うしる
行水を三伏芝蘭をあく洞庭の松
の風一声の秋を催さる人間万事
ものつゝ見仏法の結縁なり
さうなゝ四月時もをくれ
花宴の折なるて面白の氣
しき所れ洛陽の花盛り
そゝとゝいとゝ西行の庵室
うれ所の山桜花を来釈を招と
見る物をさうなゝ此山落てなん
ゝと其なる心をいてゝ月をて
のきあれ紫うゝの戸をひいく
四く入をを桜花咲なけゝれ

あ東の山を峠よりもみゝ
此本をゝをゝ立られ わ見る心
ゝとなる花の花の花落葉を観
しつ猶心をすあて而り 貴賤
雲集のゝゝゝゝ有て
昔のまゝ有様 うれ所の山
といと されゝ花なれい
捨人も花ゝ何やうれ所のゝ
御願の奥あれ世 まゝ
遠も浮世の宿御なる物をうゝ
てゝなゝ此世のおいあゝのをいい
そうつひの栖あるゝ 面ゝ此山落
まゝ花見ゝ 其ゝ志ゝ
をゝ屋をけをうゝ捨ゝ

すべて世の友とそなる花ひとつとなれば本の
もとなる花よりはまことれぬ花の友人が
心のおなれば花なるとは桜花人の
くもりのうちにあるべし桜のもとにはあり
きる　ひるべし桜の陰にれば月
あれ友の木は花を家路をたどりて徒歩
る今宵は花を下ぶしく夜を歩る
なるべし　堤木の人はれぬれば
行方なる心の花をかりけるや花
見るとは桜の人はくもりのうちにある
庭桜の秋なるは有けるみれば
花のゆるけ程をもてはるるとと
しをあるとつるる朽なる花のうち
ちかくの白髪の老人形をて西行

う奇を詠ずる有れどもつきなる
人物なり　作者はなる人う
見は夢中の翁なるべし今は徳奇の
心を形も辛ぬんある歌まうそも
夢中の翁なる夢を見れる人歌
今それつまては唯今は徳奇の
心を尋ぬんとは歌を審みるやん
そもそも人歌にて行ず不審みるべ
なるもれば人のくれのうち
あるべし桜の秋なるあるべきさく
桜の秋は何やん　いや見はたる浦
世をいとる山住なる所貴賤群集の
いとりたるとを　詠するなり
浦世をみるも山を見るもたる甚

人世ちりの有為非情無心の草木にも
ようの世のうつりあるべき
是は理なりなれどさてくるべきの
理りをあひ弁へ分別の花木の
精り 誠は花の精なるべき
よ花木の桜の花相をなる
きとも 科きいそれをいとしの
陰居に うつりなる理とまつ
花木の花もちろく桜相てるる
ら桜の科のなきとりしく花
の精ってひとり 花心なる花木も
もを実はとりは忘れや草木園も
まて 仏の法なるて 名録
やとく世ちくるひとて恵の家

普く花檜前を発て声寺国に鳥
林ちを鳴て源をくるる名朝り
落ちを踏てあひ伴なりくて
夕ある花名をさらく一時を後る
九重をさけども花の八重櫻 いく
世のまを京あるん 知る花の
名ちるきは まつ初花をいそくなる
迎接殿の名桜 凡慶を仏柳 桜を
らませて 花は書の 錦ちんらんなる
千年の桜を植 是き其名を所の
名ちる凡するまのもの 雲ちや 雲ち
ちくん 毘沙門堂ちる花 堂 天
の栄花を見まいて 虎ちる 彩へき
上ちるくちるとて 河原 昔 遍照僧正

の澤地をいでゝ鷲頂山に登る
左山の麓芝生なりて
思ひきりてあそこに清水の
地主の家松吹風の音ね山を八丁
嵐山戸渡橋を渡る瀧津波まで
家八丁ばかり井を汲む雷かゝる
そこに初めて時の佳こゝ
ほとの
滝の音ひきこゝ
あゝ名残
その夜雨降り出
降るこゝ時あひくきハなゝて
夜半一刻直千金晴は清香月影
影春の初夜
春の夜の
月初く
ねもまぬ
れこゝあまく
のまこゝ

あく志ゝ夜ハまゝみゝきこ
きゝひくこゝのゝけあゝきゝ
ハまゝ小倉の山湾はゝ夜蛙
芝桃の夢ハ覚ゝきこ
ゝこ雲もちゝきこ
同ゝ惜こゝ年の春夜ハ
ゝこゝや翁こゝ

大會

[illegible]代の教法は五時八教をけつて教内教外をわつられなく五時といひ華嚴阿含方等般若法華四教とそ是藏通別圓なり遊那表主乃祝言をなす五想成身世尊はしるきしるしをしめす方なるは仏法を崇敬をたつんなるはあるべき法とも[illegible]鷲のミ山をしるしなるべく一佛乘の岸をうつ真如の惠日あらなく鷲ミ寶塔白しく風常樂をおとつるべくなるなる白山うかべく月ハ慶殿の灯をか

たゞ風空廊の幕となりて、石
苔塵なく滑なり、苔路を掃き
よせて、あるかの心凄おくきわれ
秋禅院の宮殿のたゝりみ人書
堂を新はめなるその様、是を
出のあるみ位者なるの傳
みより命なるりゆうりそのの
よろこびゆえん唐は是あて無
くん、不思議の事なりゆえの
ものいりをみくの事やん加
東小院あるりみそれ事なりさ
めて松りめのそなりくし
ゆえ出の心なるの新ゆ

さらん秋の神通をうつあり
何みくを出望なりたるうなゆ
ゆ、是世の中をみるな
し但釋迦如来霊鷲山をて出
説法の中あり法華はひやれく
見まるうゆくそれとも
いとやさき出事なりうあう
ゆうとやを松りめゆえ定め
ワうあるうりうりうをも
なるなるうなるも約諾
しくゆうあるの中まを見なれ
松ひとゆうに立ちて日をみた
まうなるひ仏世出の誓りめきまえ
あるは時あ眼をひらきて神く出

説くゆゑいかと見まほ雲霧(くもきり)より
くもあるあり音ちらくとなるみ
ゆく道の木の葉をきると吹とて
捕(とる)をきり谷(たに)より谷(たに)へ枝(えだ)
を渡(わたす)けるく大山(おほやま)はちいさく
つちくれを生(いき)うるがごとく
事(こと)なく海をかきたれを
いとゞね故(ゆへ)なき事(こと)なり
つくや雲(くも)を音樂(おんがく)しきく
佛(ほとけ)の御(おん)前(まへ)新(あらた)きゆゑ面(おもて)を
きあらをゐまる山(やま)は則(すなわち)雲(くも)
山(やま)をなり 大地(だいち)を金(こがね)瑠璃(るり)本(ほん)
をなり七重寶樹(しちじうほうじゅ)となるく釋迦(しゃか)
如來(にょらい)の座(ざ)を設(もうけ)くは普賢(ふげん)

文殊(もんじゅ)左右(さゆう)に居(をり)菩薩(ぼさつ)衆(しゅう)雲(くも)
霞(かすみ)のごとく砂(すな)のごとくは龍神(りゅうじん)八部(はちぶ)お
のく和(わ)圓遠(えんおん)をもて加葉(かよう)河
羅(からら)大聖(だいしょう)文(もん)くは一面(いちめん)の座(ざ)をり
よりも四種(ししゅ)の花(はな)降(ふり)天人(てんにん)空(くう)を
ふるふり樂(がく)音樂(おんがく)を奏(そう)し
紫(むらさき)肝心(かんしん)の法(ほう)を説(とく)ゆゑ有(あり)難(がた)
きなり衆(しゅう)の中(なか)僧正(そうしょう)其時(そのとき)
信心(しんじん)を起(おこし)隨喜(ずいき)涙(なみだ)眼(まなこ)を濡(うるほ)
一心(いしん)に合掌(がっしょう)歸命頂礼(きみょうちょうらい)大恩教主(だいおんきょうしゅ)
釋迦如來(しゃかにょらい)恭敬禮拜(きょうけいらいはい)する有(あり)
御(ご)台顔(だいがん)ひきく震動(しんどう)帝釋(たいしゃく)天
より下(くだ)を法(ほう)を見(みる)より下(くだ)を物(もの)各
さわがおそれをなりきるみきよ

新羅より国王来見城のぐく帝釈影を
まゝ数千の魔術をおこなはゝなのなん
有つる大會ちりくるゝ成てそ見えた
るそりゝ帝釋其術怒を給ひく
くかそりゝ信者をなをおとろし
と思さんくゝ黄紙見せ給ひ風
をなてゝ翔らんとせしもそちを
明るなりくゝよりを叶はそ恐き
なをおゝ中せハ帝釈則雲路を
さてゝ行くゝ世給ふ其術を物ハいそ
根を使ひ力をと見ゝ巖根を
使ひ力をと見ゝ巖根を
使ひ力をとみゝゝ深谷の岩
河よりゝ市藤

放生河

影をあつくゝ岩くゝ四方をそ彩色
市まゝ拝見ハ常陸国鹿島の神殿
荒波の何事とハわるるなり新元社ハ
都をしく洛陽の寺社殿をなく奈
指仕ていゝ文氏須ハ八月十五日南祭を
ゝ申ハ行ゝ只今八幡ゝ事指仕作切
曇なき松の出て朝朗くゝ気色もさ
それ本幡ゝ伏見の里を遠くゝ仏田
河をとゝたゝて淀の渡橋ちく
を示ゝや神祭ゝハ幡の里に着ふ
たりくゝ多く行ゝやゝ山を若てゝ野
体くゝ神祇の御を寄ねくする中ハ
鰤の生るを好り河波ゝ月もくくや

秋の月　名山おろして風を送る　神の恵みの
ありやうん　大国を治め人を育て善を
賞し悪を懲す正直なる正代の例なり
かるがゆへに国を治る法万徳を以て不智
を以恵みを叶ひ物のつゝ積善の
徳をとゝのへ善悪をけひ知のこと
かなし恵みの道廣きちひの
海の鱗のいきをいけるを捕らって
豊なる世を治める偏に當社の
利生也かくて年も千早振神
の御代まもなく来て紙序代の
照月弓は八幡山くゝ宮路は活の久
しきのあめ堀をとゝまりて校をか
ぞへる松の風千世の聲のいやはな

いよいよ社まる社のくゝけ
當社の正神のことを皆人清浄なる
き器なるを見なる器なかりし魚
をとゝ殺生の業不審り社く
當社正事治乃人を是程の事を
きゝ見をくりの拙今見の正神事
をハ何やとゝ言ひ申されてゝ
今見れ正神のことハ放生命とゝやよ
のく　されいとゝ放生をとハ生るを
放り殺りとゝ捕へ人は魚をきる
魚を其使ゝて放生何よとゝれきん
為なり　きゝの事をなのきまひそ
其上古人を文をきゝる　方便れ殺
生なる善薩の萬行を起るやいよ

まして、やはり是ハ生ることを知て、魚ハのまぬ
物おハ、ふくりく、おちひの網ハ濃ぬ社
の恵みを新たなり　渭を引けハ面
白や面白やを知りて其ハ渭を
何事ぞ　実国返浦の恨ハ多く
の敵を亡ぼし　就生の善根ハ其
為ハ放生ハ願をおこす　ふく
ハ有翼や抱やを知りて何を
ハ知やなを　ハ法ハ元ハ河ハ
おハ渭りも神徳の　ちひハ清き石清
水の　まなひとつ山川の　岸ハ信
ふく　ハ桶ハ　ハ桶ハ　ハ網を
ふんとく　ふを抱ハ　神ひとく
法ハ　みりふハ桶を　岸ハ

ハ魚をとるハ　網ハ
岸陰の　浮荷葉動く是ハ魚ハ有
根の　実を生るを知りなる　ハ法ひ
なり　ハ　ハ　放生ハの細意を申
されハく　魚をとるハ　抑当
社ハ　すハ欽明天皇の　昔より　一百余歳
の　世を経て　山ハ移　おこ　ハ
然れハ宝殿ハ神として　ハ代を　国
家を　抜け　文武　ハ　ハ
九重　ハ　山神　ハ　ハ名ハ
ハ　文字　それ法華出世ハ　宝
真性不生の道を　ハ　ハ道
ハ　人ハ不二の　ハ　ハ　正直
ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　人ハ国より

秋風他の人とうハわの人とちうぶを
行ふ恵を宮る経やわまうとき
流あつき涙のひをてゝ絵そんの
其序於ち願国下行教和尚に御法の
水を影うる冠の教をちうんと南世
山をそ月のそそうりに衣手ふ
うり行うりされうや宗廟に祭あ
きうに君の代の真ある道を影
ハ、国富民の竈まて賑ひなの
三ちき水四海に波をたりうなり
和養諸流生の誓ひ二世安楽
の神徳に栄りや男山すり松
たてる増そ茂そ吹風を皆宮和
のひきまて嶺の山りう其ちう

里神樂懺悔の心夢さめ夜殿を
いそ神さして月ひかりうに石清水に渡
うねはひ水宮流ゝねちひのれ
ときあるとよ老人よくう種蒔くい
ふて神を告うやを駆や代をよ仕て
いうも二百餘歳に春秋を送りもく
て神徳を受て身ひとそひ武内に住い
秋あるとあるもあるに男山鳩に松み
をかりて山とさてとりけるく
あるあるに百王寿筵に日のひうゆ
ひうる聖に仕めて九歳ろに代
を秋ちうん和光てけも暮りなき
神と君とる仕て臣武内とう老人也
本社に名出現てゝ待ろる松生に神

此葉をもやさまれハ　さまざま飛ぶ鳩の
みね　山をまつりある神々の社人　雲の
の衣の袖をかへし　千早振なり天乙女
久堅の月の桂の男山　さやけき影ハ
所からなれハ神代も和歌をあけく
舞を舞ける目出たさよ　東小忌の
は衣をめし各舞をまひ給ふや　さらハ四
季の和哥をあけ其品々をまひ給ふ
春ハ霞の和歌をうたひて　花楽を成
させよ　扨夏まつりてハいかなる舞を
舞給ふ　夕涼しき河水にうちひたく
汲ゆる盃の傾杯楽を舞ふよ　さし
めてきおもしろき風の音さへハた
らも舞の拍子う　秋萩ねを悉うき

ぬるまるてまたも秋風楽を舞ふよ
月ねをつくる雪の夜ハ　廻雪の袖翻
翻そ　扨百敷の舞の舞へ　大宮人のきさ
きれる　桜　橘　ころなる花の冠を
くるをて袖うちあくよそをとまりしを
小庭楽を舞をやさのとハ何とかる
つき言葉の花を時をえて其風すそ
そきらんすて鬼も神も納受をたれ
和歌のみちこそ目出たきれく

吉良治

三月末

三ゑびの草の名まきてしくしきのつゆ
秋多ちるらん　治

是を平家に侍男七
兵衛景清ときこえしを西海の
合戦に討負ぬと聞て西国のうちに
ひしくまたひしり宿願ありて細作
ひしく都のちり清みる一方奈
義ものこりとゝ南都大仏供養の
由を作基も若菜邊の女を一人持て
いとゝ人しく思ひ信をやさしく同じ
をとゝ貴賤りまをれ面顔
の看呉今南都とゝ云ゝ云ゝ
さゝを栄ゝ花紅葉の寿永乃秋
哀いとゝ思ひぬ凡さとゝ

さても都よりならの都へ上り住
居給ふなる母上をひそかに尋ねばや
乃家に生まれて三笠の山陰
頼もしく甚だ木の下の朽ちもせぬ
まつ此世の後生安かれと神をも数へ奉り
かなく春日の里に着きにけり
急ぎ候ほどに南都若草のあたりに
つきて候。母の住処のうらく案内
申さばやと存じ候。母 誰にて渡り候ぞ
景清にて候。何と景清が参りて候と申す
南無や三世の諸仏。珍しくもまた
しかも此景清に二度逢はせて給び
給ふや。シテ 是は母上の御嘆きこそ候へ
に聞え候。唯今某が参りて候

母 我子の景清と聞くよりも覚えずに涙落つ
立出て景清なるかと悦べば。シテ 我も老
母に人をやまぎらはん。後に某が名をば高く
作あるまじく候。母 我も母の心をさに知れ
えぬにて候へ。先づ此方へ入らせ給へ。扨も此程
いづくに忍びておはしける。シテ さん候西国
の方に忍び候ひしが。宮殿の子細を聞いて
都に上り。清水寺に参籠申し候所に。大
仏供養の由承り。此所へ参りて候
貴賤の群集に紛れ。此君の為に身を捨てゝ
我は嬉しくも尋ね給ふかや。又景清に
窮まる事のなき事あり。給ふまじく母に
申し候。シテ 是は今めづらしき仰せかな。何をか
ても人に申し上ぐる事も候はず。母 御身は御出家にて

いろ〳〵分をやたて、頼朝を祈るし法
ゆう〳〵しくみやはをまことをてはう是
をおもをしもよゝぬ作るかさりなゝう西
海みゝく立ひ所一門の法師しもなの新
屋おくとおもをくを祈るひかなり言〳〵
弓取のなゝしみて祈るしやすいさる
事なきことをおすくもさゝぬ老れ
分れ果をも兄面事法へう風ふ
法ゝきゝあれ袁経の所借ふさすく
ぬをおりへおきもせに祈をておまま
をのりねゝ分をかゝたゝもなく案法ゝ
心のゝち毎もとをおりめせ一門の新の
うちくゝふ扇をゝく勝をくゝて所をく
をを月の景清の泝ゝも所あゝふ

なゝてかゝるまり一類共以不武略度
くゝふをきれを名を取悔の新ゝり
のをを定隠なゝりをさもゝゝや法
きなゝ分乃麝香を老ぬを及暑
馬ふ物ゝゝとくなり　さや彼ゝ羽
てゝ程ふ所眼中借養ふ乗ゝ上て
拝ふゝゝた乗ゝ法ゝゝと祈ゝゝ
法ふ詞をををを　実有勢き母の益也
所言葉のまもれをゝき　ちをそ安
豊雨霧ふく情をぬゝて釈迦を志
ちゝゝねゝる源のいつゝ歌心也
を母の門おゝ景清をあをを兄在ゝ
て源ゝををゝふをけゝく世ゝく

まことに大伽藍仏の供養いとくなり事上
抑是は源家の官軍右大將頼朝とは
親事なり　されども聖武皇帝
の御建立大仏殿をてはおもしはば
又此君の御威光　今は世尊のあしな
ぶり　大伽藍仏供養くひろうかゆく
其の日のことなれば山ふりけたるき法の
御聲をきゝ　供養をあをぎあり
類さくいとあまたなる人々大仏供
養の時をたふと何頼朝はとく世をのがれ
色ぬいて参りけん　面白やなんぬ都を
花めきて　ゑくかさる物清の貴賤群
集の其中は　我はそれよりとく敵を
討てとゝまとを思ふ心おのゝ名は悪

七郎清景清は　鎧兜うちぬぎ
ゝ　ゝ張浄衣なる立烏帽子　実報
あるゝ思ふさる姿　今はなるの禁は時
雨ふりおく天ゝ　弟をうしなひ侯
なき涙ぬれ果て哀まる　宮人は姿を
ゝ　ゝ哀　今ゝ　ゝ　ゝ
人なるゝ　ゝ　ゝ　ゝ
宮寺の供養の場　ゝ　ゝ
何者あれは御ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　是は春日の玄奴なるゝ　ゝ仏の
御供養場　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ
波の隅ときゝ　ゝ　ゝ

く貴賤のまなこをおどろかしてえらひ
強さんはらむとすれど郎等は君を
守りの御威光見へきけるや
景脇にも見ゆる異見の金槌光
をそれうち槌のさやつかまでた
打柄のまかねもくくと責けきへ髭を
まなりと思ひけるがきらぬなるそでたち
ぬりみへ入りけるがくれきり早鐵言語道
断只今の者をば何なるものとか存ぞ
彼こそは平家の侍悪七兵衛景清ぞや
しく我君を狙ひ申すと存ずる警
固のものども中村討たせとありければいつもの
警固の者たちうけたまはり唯今見えし
白癩をそや討てとて余る程よりと

さも高声に下知すれば畏って候とて
勇て用意の警固の兵皆一同に
立さわぐ其時景清立出ておかし
やう口惜や頼朝を狙ひかしけり
頼まれ名のらず無念なれ家をまけ
取る弓箭の恥辱となるべき事なれば
先一太刀打あひて重て時節をまつ
べしやさも言葉に待ちけるを拵
是は平家の侍悪七兵衛景清と名
乗もあへず持たる丸太をくるりとぞ
振まはし大勢に割つて入ればさしも
くるめく警固の者共四方へさつと
逃げける中に若武者すすみ出て走
寄りかかりちかきたれはひらりと飛

て手をとりかはしたちまち勝負をみをはんぬ　今人景清是迄なり〳〵と
申　彼あさ丸を
如祈念をいたし〳〵　霧立つ千代春日山とけを
る花入落をなんとうみとう時節を待く
きれと虚空を駆して失せけり

楊貴妃

日本男児作

ひのまくらきぬ清晨に道をいたし
そめさせめそ　扨もこの唐の玄宗
皇帝は仕事に方士をもつて
君臣なりしまし　海中にも仙境を
おとづれ　魂を尊ぶと仕給ひしかとも
容色美麗の美人を得給ひて寵愛
なりしひなり　則貴妃を定められ
楊家の娘なりしゆへ其名を楊
貴妃と号し　無比類なる事ありて
馬嵬の原にて失ひ給ひしかは君臣歌
き恨ひとなり　責てもの事に魂魄の行
方を尋ねて参らせの宣旨を蒙り
と若所下黄泉迄尋ねなれば　天子

竜蛇ありてをそれすひまあらず蓬莱
宮よりくれなゐの雲たなびき彼嶋を漕り
渡行方知らぬ雲たなびき寄ねゆく波
ちりくれをそれはくれをもくれの
ありてそをくれを波路をうけて
ゆくかねのちりをうえて島山の
苔のうら緑の枕ゆめとおもひ回る
ものうきをり〳〵ものうく故ゆ渡り
て仙蓬莱宮ふるてうれを宮殿臺
らうて更ふ遥なる花巖巍
〻〻くさなる七寶を鏤めうて
漢宮萬里ようそほひ去生蓬山ふ花
を是ふ又ふ渡ふ〻〻ふ
うたてふ所やふ故ふめ〻是ふた

真殿とうちうに額の作暫ありて
る御御〻事ふようをも宛ふちを
在ふ あるうのすとふ云やふ
昔ハ驪山の春ふ園ふうてなるう
花の多ふりまふ宮る世中とて今
ハ蓬莱ふ秋の洞ふ獨なるふ月影
をぬるうふる秋ふ所ふうふ
いうふなふ ふふ北宮の中ふよき事
の作ふ唐ふ天ふの勅芸使方士是まて
まうるふ玉妃ハ内ふ侍まふ
何唐帝の供ふふ何ふふ是ふ来
まるうふて九花の帳をおふ
けふ玉ふ簾をかまふ立ふ
姿をみまふ雲ふひまう 右

のくちをを寂寞なる涕眼にうちに
涸をうくさを拭くに 松雪一枝あるを
常なる軒しのぶ たゞ涙に笑蓉の
紅を失ひ柳色緑を見るにいうく
増るくき 宮中六宮に彩黛の色を
ひかるも 沙うかゝ 勅定に逆真
をまゝとをを存に 拙を〳〵 后宮堅
まく〳〵 時なるも 報恩にたゝう
給ひぬ 況くなせを固して後を
唯ひとゝに 歌きを 正命もあるく
乃えさせ給ひく作 賞てに おとり
ひりを 尋ねて 手れの宣旨を 歎
を是迄 ひり正 姿をおみをまること
呉是 君に正 心〳〵 涕〳〵 さゝ〳〵

故に思くいよく正 痛〳〵 うゝてく
宮〳〵 ゆうゝ〳〵 今に甲斐なき 効
に露の 軟をもあるぬ 魂に 乃 ゆ
ゝに 尋ね 拾ふ 正 情 に 拾れ
とゝ 拾さに まうり 帰れく なく
ハ中に 便 この風に 恨 やう 今〳〵
の 忘慕の 涙 旧里を 思 魂 を
さゝ〳〵 ゆ 有くき 事 なく ぬ いてき
ゆく 奏 同 ん さりなく 正 ゝ に
拙 を なし 拾く 是 ゝ あり 記念
よりて おに 簪 取 出 て 方 を みなく た
ひき 色 ハ いと よ 是 を 世中 ゝ
有くき 拙 ゆ れ い て う 信 拾 ゝ
正 身 を きゝ を 人 〳〵 ま し に 奉 り 拾 し

一言はんとすれども
ものいはず
ものいはずなりぬ思ひそめ
しも初も亦其初秋の七日の夜二星の
ちぎり言の葉も天のあまを
願ひくは比翼の鳥とあらん地のあら
ばねがはくは連理の枝となんと契りし
事を寵愛傳へ聞かれけ
今はしれて知る源の
流轉生死の中にはなれ
ひとりして其多の馬嵬の
ほとりに鬼の仙宮のうちに比翼
を友をさびし獨翅をかたしき連理も
枝枯て怨恨を愛する同心の
行方あらんは絶へ逢をを新をそを
語り語くやさんはいとして如何

とそなひたんゆるさと思ひうれ
ひさの
ものいはんん其心や和ハ又何中ゝ三
重に帯めくり逢もをちらねるみ
ゆうさんはちそちくあり夜
遊をなすて宮や張山の宮のう
ち月の夜遊の羽衣の曲其ゝ
みく舞しとて又取ゝ
神の鷲破霓裳羽衣の曲そよやきい
しゝ羽衣の曲ゆるめる法れ
何事そ夢ゆゝの感まや
あつま胡蝶の舞ちんちゝ去遠
ゝ
ゝを思ひいつ切夜生れ始と
未来永ゝの流轉夜生死のそも
なしゝ

生者必滅の理なるをまん先天上
の五衰より須臾の四劫を極くり
返れて千年ほどを経ん況老少不定
のさらひ歌きの中を歌おとりや秋も
昔月ハ上界の法仙なるゆ徒昔の因を
ありてかりそめ人界に生れきて楊家
の深宮なる中なる美人なるゆ
君国に召まつる急き召出 后宮に
定めおき給ひ備花回定給ふ孫
老ぬまハ徒に又嗚呼只獨ゆ
てもをみれ哀きれ君の法ゆ
たちそに色ぬるり、静なる色うき
ゆ、ちるみても思ひ出ては恨なる
甚文月れ旨の涙きみをかきし睦

言れ比翼連理を云ひ誓もうまくよ
ある私語の篠のつよの契るをよ名誉
を思ひ習ひなるて増てや年月到て往
ぬる世中をさらぬ別きれ
代をくよをひてまうそれとて
を過きえ会を定給そきく
あるうるきなりきて羽衣曲
羽衣の曲袴をひしかるうる神ちち
ゆまる心ちやんさやん高き
きうの拍子くまさる月日も
うりまひの声の籍又活り
ていをゆてさうのをて勅使ハ起
よゆりきてをさ汚みくを
君ゆ北世あひぬんゆも遠り鴻

津島深世はれるもうしやまうし
そうれや別きはとこよのうしてなる
みゝ況みくて。そうはりきる

山焼

よき先そと駄だのそ、ゝ紅ひ寺
寺わん　是ハ松かる住居そのもくひ
ねも色よわうり作方ハ松
かうれをまゝはさわ百廃山焼と
ゆ遊君みる庄屋ひ。みそれ山ゆく
ゝそそといるを曲輪ゑ作を庄
遊ひそうとを京童のつけゆかる
異名みくるそうひ又當年を庄祝
の十三ゝをあゝをなまして行る
善先寺くゆまわりのうきよう
作ゆ問秋ゆ庄供ゆ唯今信濃國
吾先ちくを急ひ松を出く遊や
志賀のゝゝあこうれゆく。まハあゝ紅

の山越く袖は露ちる宿の夕暮
けく未あり越路の旅をいそぎ侘て
遥かなれば猶行かたはるかなり
安宅の関を夕煙消ぬるき昔の跡
をさすらふの剱の礪波山雲行う
あり三越路を四日まちる里をへい
くに加賀をさすらひ河をもこえ
きりぎりす鳴る頃は是ぞ越
後を翻て境河を渡るに是より
更道あるべしとかの福を辰の
刻ばかりすぎぬ。いそぎ申し。
善光寺の路次の事仏を尋ねて
とくに是より左にある中山
あけら越とかをのに是は己身を強徒

唯心乃浄土を望て所まとる道にて
さすらふ仏乗坊叶ぬ中山
常ふ所る西方の浄土の十萬億
土とや宮ハ又強徒発起の直路なれ
ハあけらの山とやらん万里山
迷を修行の旅なれハ乗船を是ぞ信め
おき歩り跡をとめて是ぞ
しらなびく　おてぼとあらうすまて
ハあらうきやいまるこそまき
見てとり御りんれくれをなるよ
のくくお宿をもこのくに是ハ行きろ
れ山をて人里をちき所あり　おやを
をもをれもん　是ハ初り初めて意
ちく寄る老をてけり御は日に言おを

忘れ難き物なれども所詮の事なれば
さらぬ物うの事なれば今宵はお暇
申さんとて立ちかへる細道ばかりなる
山焼の歌にて一つうたひてきたる勢
ひ鄙の思ひ出なれば其為
まうの日を尋ねてお宿とも乞ふを
てんくめ稼ぐもうたてさまく
是は思ひもよらぬ事を聞いたぬ拙
誰かに話さんとて山焼の音ひとつ
なほ所をとらう いや何とうけ
ませ給へ。あまりまり遠すぎて百戸
山をみてはさうけや先ほどの
沢市とやらんより是迄は山焼の山
めぐりをなさんとて作られたり面白

所にて此の曲舞をうたひて来たれ
くつろぎを作りて淵の山うたとは
何とうまうめくしてわくしたる
の山焼は山うたを鬼女をうつ曲舞
まはれえてく 山まも鬼女とは女の
鬼とやうに鬼ありて人なりとも
山まもむ女ちうに妻う効ひとうては
作りうたや年比なるは女せたまふ
との業まれて露行も此心はうけ活
きぬ恨みを中さに乗りうう道を知り
名をなして世情万徳の妙果を開く
事此一曲の故あるうたや御くに妻う
名をもうたひ所奇音樂の妙文の
聲佛のもなく給へなとうわうも

輪廻をさとりて、武生の善所へゆく
ものとて、うぐいすをゆめ山に鳥獣を
鳴そへて、声をあげつる岩山焼う昇
鬼是迄来りて　ぬすきのうとを
きく猫叩ねずみとの山焼に是迄来
る法くるう　わを国く岩山めぐりみ
ゆ　をるわくりあるる和名
乃徳をきくん為ありて遊びたまして
さうとそこうこ妄執をとく法く
ゆくへくく辞しなるおそろや若
別のたやあくりなんをたかを
なるく時の謝るを、とるや指をす
きを和尚　ちとせ法くとそもさう
そ学ぶを法て月の夜者よ遊び法

山

四十四

く和尚亦鬼の姿を形て　ちやう
きゆの夕月のさしてきたるを急く
た山遊のく雲を心をうけそくく
其山焼う一部研究すく法ひ法て
を対和尚をも見りきる岩神法て
うくうまひを舞ひとうとと乃基へ
其俗ときをひをうん出をうくく
餘りのうめてきたきくみ鬼おも
わえる鬼女うことをたくしく
松風をもにてく笛ひく琴すをわる
法川ま手先さくきをと曲水ひ月を舞
すを深山うれくあくすこの
深谷やるくく密林を骨を打霊鬼
法前生の業を恨を法野を死を

借をもて天人を欺く。我生の善をよろこぶ如いやはなと善悪不二何をうらみ何をうらむこころん萬箇目前の境界懸河瀉ごとくして尽もせず御くだり山猪山いつまでの上より青岩の形ちを削りなしたる水墨の如く家々の茅屋芝垣を深山もとるおもろ おもろ ゆかしも物をうれ霄の間の月を本深き山陰より甚うるはしきなる新のそゝろ根先の咲くはなり其山焼のてまり花のようとてもたゆ穂の出神 さみ葉のうきもきそろ 絶さらく 見るかおそれ弦そそよ 花とはおそれ なるゝ高ねむのくゝ花きれよる歌を生る姿泡をへ

なるとも 髪のへ荊棘の雪を載さ眼の光の星のとく 如面芝 ゆろを沙弥塗の 軒の瓦の鬼の形ち 今霄ちめそ見るとを 何をたとん ゆるしみ 鬼一口の雨の夜なく うゝ なりさわきおそろき其おを ひ白き何うとひ人遠も 和めの くるなりぬの金 淫世かるもろ ごやく 其の夜の一時を千金よ そくしろん 光の清秀月の影 是を畳のたちそこにりあの人の歌の長 其一刹を行くゝ夜ふ ゆく 御ひる まつて 笑けうくもかくをいる ゆそる山中の 一聲の山鳥羽を叩く

熱の沸波 神の白砂 雲をめぐらせる
なの 鞍波の事 法なるぬ
ゆ あり 雲巻山焼のよう 見ひおの山
焼の山めぐりをそそるき それ
山をいりも塵ひちらをれらりて 天
雲かるチ巻のうれ 海の苦れ雲より
心ひて 波濤をたむ 弟水さて
一洞うき谷れ声 猶ほ雷を山彦の
無聲音を聞けようなれ 怒るし
ゆ谷をうれとをみを宮くゆん
ぬるかもむ山河の氣色 山うるして
海辺く谷深うてみ流し 前
ほ海水流くうて月真れ光りを
掲げ背ほ嶺れ鞠うて風常ほの

夢を破る 遠色の便をとるぬ山中
ほ 覚来なるも呼ほ鳥れ怒り凄き折へ
伏本丁くうて山きうて出ほり法性峯
踏てそ上求菩提をあうう 無明
谷みき枯ひ下化衆生を表して
金輪隆ほおよう 抜山焼ハ生ほも
ちし常もなくなる雲水を使ていい
なるぬ山の枯をなる 鄙色ぬ
人間ほあうしとて 満つる雲れ
をくかるる自性を変化して一念化生
の鬼女をなりく 目前ほ来れども
邪正一如とひる時 色即是空の
使ほ 仏法あまハ世法あり 煩悩あれ
を菩提あり 仏あまハ衆生あり 衆生ほ

まゝ山焼をあり、初は緑、色は紅に色く、
初人間のあるこゝろ、或時は山賤の想
路を通ず、荒の陰、体を重荷の肩を
うゝ用ゐるとも、山を出、里迄送る折
をなりて、或時は織姫の、百機特たつ
ま宮を入りて、えもいはず、萬ものくり、紡績
の宿を為、人をたゝくに業を
のこ、賤の目をくぬ鬼を人のるる
ぬん、世を空蟬のかつ衣
なゝ、神なおく霜は夜を月る堤を
也、擣ちを人絶間なるも、千声寒
聲の破るゝ、そらりそたる山
焼の業なるも、初は向りて夜語るを
させ給へ、思ひは、妄執の呂打

捨よ何事をうら見ひきて山焼の山
めくりそくくくくき寄見世の
山免くりに一樹のけ一何なれ
皆是他生の縁そうに、増ても和名
をゆ月見、浮世をつゝ新ふ
和言綺語の通そる、讃仏業の
因そうあゝ仏名をやゝ眠りて
帰る山の、春を惜ふ吸を徐
たれをそうりなて山めそう、秋は
さやきき影をたゝて、月見る方
る山免くりに免は泛く時雨の雲
見雪を誘ひて山也りめくりく
て猪巳をたなきぬ妄執の雲
磨ためりく山焼となれる、鬼堂の

有根尼やく岸を崖よりけむり登り
ひしひしく今迄寄るあまをみそなはす
山復山を山めぐり山又山まで山めぐり
して宮居をさしなりぬるをそ

鶴

ロキ僧深井

世を捨人の根乃をそくに来方いつく
なるらん是へ都ちかう出る僧
みちく作和歌は三熊野を一七日
未籠中今を下向道なをる津
国芦屋の里をも一見して心静ふ
都くのちらもやを思ひ作和歌も
なくゆり紀の路の国都をすくく
ゆり末へ和泉なる志のゝ森を
うちもとく松原見えて堂里の家
住の江や難波の芦屋のさとり
見るをりくきりやや効
を龍島心をもまよは青龍の淵水
唯うんをいる堀水のさゝそるれ

そなたひとりして、執心何とおるるんうきさ
沉む洞の波のうりわあ　ぬれて浦
ぬるる　袖ひちつくさ　隙をなき
ぬ　きあかあまうひるあをと乃至へあ
のかうちは有なく　業人影もき
うなくすあく不思議のものやか
不思議のものやとれるそあるそいう
なるくやん　和いそそうり　堤本のく人
きれぬあと思ふく不審はあさせ
給ひうそよ　いや見へたる　北里人は
さもきあを　あ人の　寝るく　寝ると
いひつるとは　かもうはは　和を
不審をとあり　北里人を見て　屋
の　潮の塩焼あ　海人のたひを何と

粉ひ　塩焼海士のたくひなく
ひをなさていうあをきてよる
く　寝るは不審なり　何をもいう海
のあるるを粉ひ　も謂あり　古き
奇なる　声の屋の　潮の塩焼いとま
なし　黄楊の小櫛　さそきをもり
ふれもうきうはいうあおみの　沒な
さそて　あ人は　さそきにきて
うりう舟　現ク　夢ク明てうう
見うもかうあ　声の屋を　一夜宿
て海士人の心の関をとひ　あを
うや粉人は世を　見れる　男なり
和は名のそて　捨少あ　法の力と　粉むあを
く　何と見ゆ　せうもあ　人間と

ハ人こゝにいとなれるものゝ名を答へ
今ハ何やうつゝなくき是ハ昔近衛
院の御宇に頼政の矢先ふかりく
身をとゞめ鵺と化生のもの幽
霊ゝゝ出りて無名作をゝめ流
さゝ雷なるゝ雲あるゝに
まゝ申作詠をゝ詠て給り
いく あとをゝ聞よゝひて
其時ゝ仁平ゝ頃ゝ近衛院の御在位のゝ
さゝ仁平の頃ゝ
あゝ有験の高僧貴僧を作て
大法を修をゝきれども甚
さゝになりけゝ御悩ハ世

芸劇たゝりみく有きゝに東三條の
森のゝより黒雲ひ〻〻〻と立り
御殿のゝゝを覆ハかゝるゝ
ひゝ 剛公卿詮議あつく
定めて変化の物あるべし 就ては
く警固者〻〻とて源氏の家の兵
を撰きゝをゝ召ゝ頼政をえゝ
ゝれたゝ 頼政其時ハ兵庫頭とて
ゝ剛者なる郎等ハ猪早太只
一人ゝ〻〻〻たり 頼政ハ二重の箙
に山鳥の尾をてゝ
矢二すゝ滝口の弓を
御殿の大床り伺候て御脳の剛
浪を今やく待居ゝ

あんのごとく黒雲一叢立ち来り殿
の上を覆ひ雷頻に吼と見えしが
雷電はあやまき相の姿あり矢を
つがひ弦を引き南無八幡大菩薩と
心中に祈念してよろひきひ取ると
放つ矢は半ばを過ぎてもと出る
えりやわらめと矢叫びして落る
所を拾ひ上げとりてつきさし
り九刀を制ぶりを切り扱ひをも
しよく見れば頭八岐尾は蛇足手は
虎のごとくみて啼き鳴く仏ぶり
名を怖しきものもおろかなるうち
なりをもて空くれなき世ぶり
甚一念を凝らし力となり給へ

うつくき仏なりさのふるみとまこと
角相あるふうう沉をいうみえん
なるあ見きやは仏生の縁をとて
時もそあれ今宵しも なきき
世の人をひ行の年ぶりなち
しらいほあ 来と見ぶりうよ
あの法を深め沉あ見えいく
きなえくのいをくるきくを聴し声
怖しや冷ぶあるあそ沙やすき
あや 沙法の撥を松風もく
皆実相の道廣き法をあよと夜
ぶをと彼正経を法滴する仏法を
読滴すち一仏成道観見法界茶太
国土悉皆成仏 有情非情皆共成仏

新しく　新しくや　五十二類も
和同性の涅槃をしられて　真如の月
の夜はあらはれ　法身は遠処を
有縁や　きやすく目前に来る　抱
を見まる　面は猿　足手は虎　皆
ゆゆしき変化の姿　あらはれて
有れやか　抱も見て　思心外なの変
化也　ありがたく　仏法を法の師とな
らんとて　城也　遍歩して　東三条の
林頭に　小時　死行し　世間をの
疾　ありがたく　序殿の　とり　乱おろへ
則　悩頻みて　玉殿をなやは
きて　おびえたおおらを　給ふを　和作
業のいりとなり　きたに　思ひもよらさ

ず　頼政の矢先に　あらまほ　雲の
うとし　ふるとと　地に　倒まて　息
も滅　事　思へば　頼政の矢先より
君の天罰をあらはすと　今こそ
思ひ　きなを　甚は主上　感あつく
那　ものとは　剣を　和ひ　されば
を　宇治の　大臣　殿　ひ　階を　ひり
給ふ　折　鄙　音つきけ　大臣
元　敵　習　名も　雲井に　揚れ
れと　作れ　きれ　頼政　右の膝を
ぬいく　たの　神を　しろを　月を　すし
用　ふけて　弓　月の　いて　ひて　と
ぬ　まり　ひ　剣を　ひり　ひ　前を　ま
かり　ぬ　和政　名を　抱　ひ

名を流すらつい舟よ。杉、まつ、はて
淀河のよどみうつ流れ、れ末の難波
を回一岸の屋の海ちのうきすに
流れうつく杉ちのうらのちの舟の
月白を見て晴さうてうき道を
入るを見ちうてて、世山の端に
遠よてうを山の端の月をうを
海月を入るうり海月をうを入り
きり

富士山

大和唐土所所のくにとなく雲ゐよ
ゐてうん　是ハ唐土眼明寺にたく
さうをいと申寺より我日本
の国をはちめ百姓を見うふ山海州
本ち懐まても さなうう仙所と見へ
く海よ非国の姿を顕りをり昔
唐土の方をいり老見る国り弱河
国富山を国見、不死の薬を求えうる
例あり。我も其遺跡を尋んなら
只今弱河国の山を翅に唐土の
空ハ雲母を満其くく東の国を
見て も 東海の末遠き海山なて
金うや日数をねてい程よ名のき

きらし富士は根や裾野までもなく見えわかり
きらもし目をまよはす頭より足まで
なや富士の称なる者こそは絵にかく
唐土まで聞えしよりも影を移りて
目を驚かしたる山のかゝりてはあたかも
又あまを刈ま海人とおもひきや女姓の
あるなりけり彼をちとおまち事は子細
をも尋ねるを存候砂長する山
川やくみに鳴海なる絶ぬ朝日
さし高根の浮雲うきねて野ハ夕色の
富士おろし雲をおりる田子の浦に
あさしと見えし海乙女は通ひなれさ
る磯の浪もよるくいりる宮まらん
変心なき海人まれでも所ゝとそ

そし須さよ松風の音信のさみしき
おやをそ声の磯は宮の御くり并よ
きる駿河の海ハ名のさみしく浪静
なる朝風に雲はらまき鳴る声なきと風
を夏雲の深さとこそ湖水まゐる雲上
をみちされ山の中静かれくそのを
なる人さよ尋ねへき事のは此方の
ままで何をみるくを昔をいたし
は方をいう老許すにまたり不死の
薬を求め帰る所あり秘する其遺跡
をも尋ねて見まで来りる所遺跡
をもり語りや言ひさき事あり
なり昔鶯はかいこ化して身も安となり
しを時の帝は皇成まし附まり

百

を彩り天さかるり話しの時おんの続り
不死薬を添くくおき話しを陰ま
富士の高きく甚を篇より
富士は徐ハ云なり絵をハ和漢ハ
不死山なりと、其の名よりせて富
士の山とハ中なり是を貴の仙なり
抑ハ山仙なるて先目前の有様
みを今ハ冬無月旬なるに雪ありて
自然なり是ハいなる事なるんされ
ハ云て我朝そを不審年、然まる
昔より奇仙のことに時ちゝ山ハ
の根いりとそ鹿を踏ま雪みるん
是三伏の夏より奇なり宮くくきく
ふ潤ありり時ちゝてお年月なる

さなるく富士ハ雪山なるまハ時ちゝぬとハ
理りうれ 殊更今ハ眺めて今き
涙をゆるぬ四の時 ありお空ま雪
見えて さなるく一番に 夏 冬
三保を松原田ハ海ハ山まるいを
みなるおなるふ高根ハ白きみ雪を
きるも時ちゝ山と海をとるや
実わを紙の筆き時代神家くちく
まきを話ハ山を
ゆく 掃部富士山とハ月支七
の山天竺より飛来る山ハ射新山
となるけるる 頂上ハ八葉みく四り
清池を湛へり 神僊人化の境界
ちく四季折ちを顕りて我修仏

芝通をそゝぐ。帝代の異跡他に異也。

凡富士の根は年に高き様増さんと消ぬ
るゝふ積る雪は見れば美山の言葉
ごゝを偽ひ其ゝ富士裾野よりゝ雲
のゝ上を晴ゝ青山ゝ何くゝより姿
やん雲ゝ雨ゝ雪ゝ霧ゝ雷ゝ雹ゝ霰ゝ此山ゝ
仙郷の隠れ里人ゝ美なる其陽
弦も日の行ゝ月の行ゝ水乃玉地ゝ
皇女備ゝ給ゝ不死薬をそゝ
ぎゝ天ゝ羽衣芝雲路ゝ立帰
つゝ神ゝ成ゝ帝其後かゝ
や姫ゝ歌ゝ隠ゝ富ゝ富ゝ
ゝゝ不死薬を嘗ゝ煙ゝ
美天ゝ昇ゝ雲ゝ霧ゝ

薫ゝ花ゝ月ゝ星ゝ宿ゝ
ひゝりゝをゝなゝ名ゝ
も山ゝ上ゝ不死美ゝ
ゝ是ゝ名ゝ西ゝ
ゝ対ゝ山ゝ名ゝ
山ゝ彩ゝ

山の謂は風ゝひゝぬゝあゝに凡ゝた
ゝ山ゝいゝゝ山ゝゝ言
山ゝ富ゝ高ゝ金脇ゝ紀
ゝ是ゝ高ゝ神ゝ
法同大菩薩ゝ
ゝ法ゝ大菩薩ゝ
ゝ神ゝ
ゝ神ゝ名

さみだれに顕はさへ沙門のあさまるわ成り
なん不死の薬へ行くつゝ[illegible]
てさそ[illegible]を山れ雲となりく空昇れ
富士の根のゆき方さく久なりるそ
くかゝそれへ富士は嶽のくも
ちれく空色ひろりを抱よそて世界
の雲を明くなり[illegible]抱是へ富士山を住て
悪子を掃ひ国を治れ日の沙門を
祈事なり[illegible]漢朝の勅使此所り
来り不死の薬を求む甚志深き故
不老不死の仙薬別うまに学ぶて
と仙宅あくまを国をらへく屋
[illegible]音楽国ふ[illegible]姿をぬなるかくや
姫の薬を勅使よ[illegible]

上
簫笛琴琵琶筑紫箏[illegible]
[illegible]れ富士沙門[illegible]共今の[illegible]向[illegible]
なる有様[illegible]天[illegible]の[illegible]
小國なる[illegible]雷神誠[illegible]
[illegible]悪子を退け[illegible]中に美
なる富士は嶽へ金[illegible]の形ちを
顕[illegible]
不老不死の薬を求め勅使へ神[illegible]
[illegible]
姫へ[illegible]雲[illegible]
[illegible]雲丹よ[illegible]
[illegible]

生田敦盛

平家物

かゝるに此ハ黒谷の法然上人の使
ゝ[illegible]なりけるを上人加茂に詣りの時さり松にて
とゞまりもいまゝき男女の二人をとりあ
るを手ん箱の墨壺入を奇なる拾く
捨置るを法然上人不便に思召
を抱きて帰り育て法師にして仏
行をやせ十歳なるあり法然父
母のなき事哀なりと給ひ仏
ちなる法師の後世事を弔ふ
得へ独立の中より善き女性を
出わかるまてひとりゝ中されに行り
ひとりに法師なるをひとりを一の

谷にて討たれさせ給ひし無官の
大夫敦盛の忘れ形見にてましまし
申されしが此事をきこしめされ父御
見たく思し召す事を歎かせ給ひ御
命も危く見えさせ給へば程近き加茂の
明神へ一七日参らせ申し父の
御姿を見せ給へと御祈誓あり今日満参
にて候同じく供申し唯今明神へ参り
候急ぎ候程に是ははや加茂の明
神にて候心静かに御祈念候へ有難
や所から。ある御社の瑞垣神
さびて心をそむる御手洗の。かげに
うつす水の。夢ともなりとも生
親の其姿を見せ給へと祈りける

心の末かけて。くめば浅き水ながら
深き心を知るひとの神ぞもしれ
願ひを叶へ給へや。あら
不思議や睡眠のうちに有難き
霊夢を蒙りて候あらめでたや
何と申す事御霊夢を蒙り候ぞ
我御宝殿の内よりもあらたなる御
声にて汝夢ならでも父を見ん
と思はば是より摂津国生田の森へ下れ
とあらたに霊夢を蒙りて候是
はまことに有難き御事にて候さあらば
是より直に生田の森へと御供
申さうずるにて候山陰の加茂の宮
居出でて急ぐ行方は山崎や

谷にて討れさせ給ひし無官の
大夫敦盛にてましますなるぞ。さればとよ
申されければ若君をきゝ給ひ御涙
にむせびましますが手を離し給ひて
命も危く見へさせ給ひければ加茂の
明神へ一七日籠らせ給ひ中に夢になりとも父の
御姿を見せ給へと御祈誓ありければ今日満参
こそは同じ御供申し唯今明神へ参り
しば御心静かに是やこそ加茂の明
神にては御心静かに御祈念ありて末有社
参詣あるる御社の瑞垣神
さりて心をそむる御手洗の水にて
めぐみを転じ夢になりとも生
親男の其御姿を見せ給へと祈りける

心のうちこそけなげなる。みなちかごろ
さる程にちはやぶる神の神さびて
声を叶へれつゝあはせく、あゝる
うつゝやまどろみ膝枕のうちになつかしき
異香を薫りてはあらためてなや。
何と申すも霊夢ありて候ぞ
神の御宝殿の内よりもあらたなる御
声を出し御夢にありとも見えさせん
と思へば是より津国生田の森へ参る
べしとありて異香を薫じては是
ハッとおどろき御事にては掲げさせ給へ
あれより直に生田の森へ急ぎ給ふ
中々すゝめて候ふ山陰の加茂の宮
居残されて急ぎ行方は山崎や

霧立渡る水面に漁火の影を分て入佐布
秋を待つるきつねとうんと鳴く
しば田の生田の森を見つるまもなく
急に行きこれなりやと生田の森
見つるに森のうしき何ぞなるまで
やとみて所なる所なりも行
る名所にて侍るみなれば
八生田を小屋にてやはら年
眺をやとなびくに
名をやはり寄てあれば人屋
寄りて行の夫れ
惜をも思ひ紙上五濃守より是迄宣伝
み因く年生弟を知をん機を
出流八月月光験を
秋風を嘆くあく心をこの折
ふとなれば是なる新茶屋の内
も襖ふる若武者の甲冑を着
見て行やられ新人
愚の人を心
詩も詩面の
うすくみ新風の出美
なるのう新風
も寄
絶
鳴音
を深
ふ
ぬ
を

金紀功碑墨痕淋漓の筆法を見るべし。碑文は孝行
を尽せし故加茂の明神あらはれ給ひ
しに夢のごとくにて親父の死骸
を見たてまつり涙を流し祈誓の
情をあらはす。爾時伊賀国
五位を賜ひ給ひしのいとまを給ひ
親元へ帰り給ひ今を限りとなり
文行用の老夕昔をいまに語り給ふ
新年家の栄枯をきゝ給ひ其初め
紀鳥風月を題詩詩歌管絃に
よき秋を楽しみ給ふ。
折ふしきゝ給ふ本曾の物がたり
敵よ落されぬと上洛

なり一門共人を遣はし紀の松を立出
西海の波を越さねばならぬ
ひとをこゝ山を越海を渡りこゝを
天離ひなの住居共なれども
又を渡るこゝ海の波戸共山路共一谷
生田の森よ哀しかの義経を
やと一門共人こゝをよろこびとなり
紀頼経新経の其勢雲霞
のごとく共こゝ我もいくも
平家の運をつき弓の八十嶋こゝろ
をよろこと皆ちりくるなりて
表もつて紀生田河内を捨て拍子
こゝをこゝらこゝをけり
哀哀数多のうるこゝなり新

あらむの神変あまく名将あまねく心帝釈
いまた見ざりしいかなる者ぞ何国へ
よその使ひや件の時のいと雷仰られ
しよ今迄の手を集め間をいて給
ふそ空を見とて見なりやうく
黒雲倒れ立昇り猛火をちらし劔
をふらして其数きらさる修羅の敵
天地をひゞかしみちくたならし
明かなるなるつる修羅のうしろそうし
空たかく真向りきしうちくもやう
うちもめくり火をちらし
てたちもしばし鬨ありて又雷も次
第にさしも修羅の数え忽ち消
うせて月澄わたりくめいくなる

暁の空こそあはれなりけれ恥しや
あらはれもかくくまもみえ見えて
そよいまたかくなき仏を祈ん
あそりとともなひ経と給
をうつあらはれ姿をうけるものを
めの頃薄の露霜とくるら消えて失せ
まさりかくちのきえて失せけり

年信行

是を紫野のあたりに住居する僧
ありしに我一基の向花をたてまつる佛
小僧養しなり作花をたてまつる安居も
まもりたりて行ひ今日花の供養
をなさんとおもひをこしに敬白之花
供養の事右此情草木心なりと
いへども其心内よりそなはる此花光
陰に開きたり豈心なりとそんや
なかむづく派出し蓮一乗妙典
の題目あり其たち深ふかくして
草木国土悉皆成佛 年月日

多くあつまりたるなりなりなり三世の
佛は花をみたり 不思議やな

中分上

年上

花窓くらして人家を見てめぐよ
るも女性一人来り法ひ去りぬきされ
れおのをとしより去りの眉をひらき
なれをいふる色をくく弟子して
愚乃法師の作なるをうられ時の
物なれをあとらいるれとは法をを
らむさりかくく名を人めるを言
いやしき垣ほのかるとれを去り
やちぬへ理なり是を夕顔の色
まくさかくく言くさくと夕貌の
花のあるいはなる人に名のるを
と法ふ去り去りに是へ此原
の草れ陰より奈をくり
きやさくくをなくくの乃法師を

あるんためうれよつけるも名のり
法く名を有るくなき法ふあり
しれをのかりあるの流を
を常をちるる寝る五條法
をと夕顔のくくめ乃り
者をなりねをけをりなる
跡のをむの陰ふれるくく
あるくをるるをくくを五条法
をよ来て乃をを弟にををくの
居まり屋くなくをとをを夕
貌芝瓢簞をくくを草顔閉
ちまくり法 藜羅ゆく
鎖をり夕陽の山扃新を忘れ
らりくくを去をたんの泉の奈

雨原憲うとちうを紙にすさ
くを紬をくくりたる山の雪
宮曙宿 窓涼てさくる朧月ハ
琴弾まあくり 慈傷の秋哀風
拍すしゆゆ金や 実拍をくる
風のまはすとの竹垣あくり世のゆゆ
の海を凡を浮く墨提を深くくる
ちんや 山の渇れ心もきて入月へ
らはの宮くく後 新のくいり
あくきや 山畑の垣あくるくを
くを 宮をけよなて あ宮
庵の海をまくくなへ 孫くくる
中くる きくなと拍しみくくの宮
茶のくとこ初 ちきくく之山

甚は源氏の中将と同くくそ山夕
良の草枕きくかりくれ秋をすく
瀧をきけハくよくのやくくけ精
進宮に籠りく南無到底道導法
蒲勧佛とくくなくくを今をくり
とれくくりくの時の拍ひい
てくをてくくよくく秋ふくく
くれくくをくくを源氏宮を
くくを浮ひ夕法くく性光を拍ふ
くせあの庵をれとのくくへと浮き
屋のはまいなくくくくくみ海
くれを折くくまくくくく源氏て
くくと宮宮くくく宮 おくくくくくを

人をとりかへるとて、ものをとれば、ものをとれば、
すゑの松原、ものをとれば、ものをとれば、
あしひきの、ものをとれば、ものをとれば、
神さびて、ものをとれば、ものをとれば、
定めあまの、ものをとれば、ものをとれば、
海の上、ものをとれば、ものをとれば、
折くくる、ものをとれば、ものをとれば、
花の夕、ものをとれば、ものをとれば、
うれ花、ものをとれば、ものをとれば、
ものをとれば、ものをとれば、
おとこ、ものをとれば、ものをとれば、
海をとりて、ものをとれば、ものをとれば、
あさまつもなりわてさ、明はさたと

夕顔のつとをあきはさたとみる新
芝をとりれば、ま新のうちまいて
其まゝ養とは、なりうたる

邯鄲

浮世の栄はまことにきてくる者術をいかにと定めん　栄は是八蜀の國にかくて雲生ゆ者あり是人國にありて仙道を学ぶ志なし憐然ゆ吟て善すくりあり　おとも楚國の石ゝひ山は貴た智識のあり国すう国のそ行は分の一大事を尋ん為只今石ゝひ山と云ひ伝別国を雲游のあとまくく山又山ゆ越ゆきハそこ〻ちあき松心野善山善里ゝ名みのきゝ邯鄲の里みもとゆ色善ゝり里もよく安ゝ

色　名ゝ行は是ハとゆ邯鄲の里

とやかに今夜は元服の儀式せらるる
べき所なるに是は国々の郡郷の枕
なるに是は強盗門出のよろこび
夢に告天のあるべきなるべし一村
雨のあるやうにて日はまだ暮れざる中宿
のかりねに雲を見るやうに耶輔の枕
ゆめのうちにいろ雲まよひ武
事のいそもいろ新たなる楚国の
帝に作位を雲まる儀ありきんとの勅
使を是迄遣はるるも思ひよらぬ
王位なるそも何故なるそなるべき
是程をいそぎたるべきに
陽といそぎ其儀相ふまはるべ
時刻ありかるべきやいかに

めさるべし こはそも何とはいふべき
暗くむの雲のそもなるべき
かなしとはいはんにて 天もあるべ
ぬちにて むの夢のうちの葉
花の花を一時の景とはいふ雲
人やあるべ きなる有雅のた
き雅れくとよりも高き雲に月を
光りは明るきに雲は閑や阿房殿光
も満るべ 有れたる
金銀の砂を敷き四方に囲む門戸
を出入人を光を
はとや名る間一麻光の初長見城
たるべ
千顆萬顆のこたかるべ

新く掘れば千戸萬戸の旗のあり、天下名所地をひく籟の聲を聞く、籟の声もおびたゞしく東より三十金丈は銀の山をつゝせくに金の日輪出されば西より三十金丈は金の山をつゝせくに銀の月光をせくに月光をせくに是は長生殿の裡なる春秋富を不老門のおろる日月おそしやをふるをまなぶべしいるる莫迦ものをすれば何ぞ信を取ひくらもやはり五十ばかりもあれば仙藥の効呂を五年一千家を保ち給ふ去程に天の漿や流灑の盃是を抑くまりうを抑をの漿とは是仙家の酒れ名なり かゝるいのちをいはゝ事へ 呂を仙家の盃なり 壽命を千代をときくの酒 栄花れまも いまうら 君を豊に民をうえ 四海安全ぞ久の栄花をうけ給ふ 八洲をうり 若の菊の色をうりくるいさや のおうよ めくれば盃のくまれを菊水の流をひくまくすれば手にあり さゝ菊の花のたなびくくてさもひくをひりなれやさつきのうけめをそ久しきさ 秋宿れく菊の志ら家きやとこいを 世つのるく惜やをうんよもつ くゝ藥の水を泉ぶれをくあるも

[illegible]
[illegible]
の夜晝とあそび樂しみの榮花るも榮
曜みも實はうつろひあるべき樂いりあてて
いりあくうの榮花の榮をくとなれば
みくなるはいくとして有明の月は月人
男は孫なれの雲の猶紙をとれつく
悦ひのうるとすうたるうるくく
日をみもくあさくけくなりて夜と
男くは晝よりは金とはとくを
月はさやくて春の花さけは紅葉
を色くく夏とはりは雪も降つて
四季折々の目は前みくを春夏秋冬万
本千枝を一時を色さけを面白やく

きやうの春とくて時をしられくを五十
年は榮華もあるまとは夢の中なれは
女御更衣百官卿相千戸萬戸侯頼春
屋宮殿樓閣きくを失ふて
有つる邯鄲の枕は夢の覺は覺
ぬり屠蘇は夢覺てくを五十
の春秋榮花もたちまちに枯悴と
変あるて春をかく女御
更衣はうるを風は松風の
ありは宮殿樓閣は唯邯鄲は仮
の宿榮華の程は五十の春秋
同を榮花の一炊の同なりは
さあるやとりかくしやはは
人は有花と榮はは百年は歡

樂を尊とうれいゆうりう五十年の
榮華にて分の為は是迄なり榮
花の夢も盃のたりそも五十の歡
樂にて信濃なる人は是迄なり實。何
事そ一炊の夢　南無三寶ゆ私三宝
能く人の出離を求る智識ハ世捨ありて
實有翁や耶郭の實を發や好彩れ
愛に世そ世さとりえくのそみ吐く
て詠りをそ

黒塚

山伏二人井
桜の衣ハ鈴懸にて露を紅袖をち
りくん　是ハ那須の東光坊の河
内梨祐慶と申奴なり　それ迄門
弟撥の行脚ハ山々に修行を
熊野巡ハ四国を皆紀州の習ひ
なり　祐慶此間心ゆたりる
願ありて四国行脚ゆ赴んと思う
中山を越ぬ　すて行末ハ紀州海
辺堺浦巡らんとて
の方面をたりくハ紅葉れ桜衣
日も暮れハ宿を求ものを国
しみちのくに安達ヶ原ゆ宿を求て
多くの人ゆ陸奥安達ヶ原ゆ宿を求て

いとやはの苔くれ行ふあれ行若人くれと
きゝくるまねゆき家はかゝるまを招を
ひ作実僧人の習ひ学を出てき
拙そうもあゝかゝる浮世る秋に来て
朝を風へ分るもめ枕胸を体むるる
もゝく眠日を宵くゝ苔ねをへ真
眠を夜まう涙ゝるあゝ定めなに分
上やれいゝる西崎月に流て涙
月苔れ帰り老てに一夜
れ夜と宵くゝ仮寝に見若き
紫の苔て寝お宮へけひいま
いゝる地をきて行く初て連奥れ安
を宮行苔て宮とゝさ使なゝ
行ゝくへ秋を情て一夜れ夜を袋

行く人里遠さ世聖見れ松風寄き紫
れ屋ゝいてお宮寝寄ゝを宮より
松の苔枕ゝるひたりれ仮寝ん
見夜の苔ゝ行く住刻るれゝるも
き苔庵に唯ときんと紫乃戸行
さすう松ゝいゝ行きふ ゝゝへゝまり
行くとて扉を披き乙出ると草を
まる堂遠くくてやゝるひきゝ
なまりゝきしても夜を仮枕片袋軸の
袋深き苔れ苔苔をゝなお松寝
の宮を懐きくゝ いゝるにゝき
事れは是るる拙へ伺ゝ拙ゝれう
あまゝう新めの沙女れ堂むゝく
を輪ゝ拙みゝれ きゝへあれと

とならでは見えまじく、安き事にてある
て後日を経よで、御身や猶人の見るめも
ちらでいつとなき賤が業ぞ悲しき
も、今宵ぞ宿る此宿の、主の情よ
くさまの月もさしくる庭の、面ぞ
真如の月をくもりなくなし
を今はあさましや、賤が業ぞ、その
よるまでも、世渡る業こそ物憂けれ
きれに浅ましき人界に生をうけ
あさかかる拙き世に生れ身をを
まことも、さよ、ちかふ人
の、その業やまつ生身を抜けて
ら仏身を得る便もあるべし、かかる
世すがらに明かしまぎれぬあはれ
さも心なき真のさとりならひなるいの
そもそもいつまでか仏果のえんとなり
厭まん只是地水火風のかりそめ
を纏はれて生死の輪廻し五道六道に
廻るも只一心のまよひなり凡
人間の化なる事を案ずるに人ある
若きはよろし終には老となる物をと
咲きたれき夢の世なるや厭ふ秋
あさあるならば心にも恨みなるらひ
なり切りぬ物も又来ならず
夕べの雲を尋ねては日かげのいとの
うそぶきぞそれの名もなき人やらん
かもの浮生あるに飾りしは縁なき
のあやまてそけも多様なさも

[illegible]は[illegible]ハ　来る人多き書[illegible]
穂ゑ出る秋の糸薄　月[illegible]
[illegible]　今[illegible]賤[illegible]
なるき命の[illegible]
[illegible]
[illegible]

されども恨のためり果りなを絶を
うしなれば咸陽宮ぬをのりみんく
なを野風山風吹荒て鳴神稲
妻天地をゆり空捧くをる雨ぬ降る
鬼一口はくをんとてあゆをよりあり
ねをみり揚る清林はいををひ所をを
ぬ掃りく怖しやかけり東方は降三世
明王　南方は軍吒利夜叉明王　西方
は大威徳明王　北方は金剛夜叉明王　中央
は大日大聖不動明王　唵呼嚕〻〻旋荼利摩
登枳唵阿毘羅吽欠娑婆訶吽多
羅吒干鑰見我身者發菩提心く聞我
名者断悪修善聴我說者得大智恵
智我身者即身成佛即身成佛と明王

の慈悲はうけく責うけくいのり
みせるをそを懲よ今ぬはうをを
宮くいりをなりつる鬼女をるうを
ををりをををををををををををををを
くくを見ををはよりくくを深いをる
安をうををを黒塚をくれ信をを
をををなりをる法をや所のをを
深色をいつををいを抱ををあくを
ををはなををすをををを夜をくくの
青をををををををををををををを
ををを生ををを

嵐山

吉野の花を種とうしなひ嵐山
は急なん　抑是は當今は住なる
所なり　扨も嵐の山は名を今と昔か
ら君少名人を訪ひ給へる事
也　その宣旨を蒙り此今嵐の山と
急いで　扨　名所　の山　と
く　千年の種は是ひとて　尋ねて今そ
こよりは　雲と　流れ　其歌人の
名誉をとどめ　国　なれは　その　風
妙なる　氣色　なれく　を　嵐山
　　
　　
　　

めのれ是八比叡山の花をうるたぐの
ちなてしなり　大内漢千里に和なれハ
花見の伴幸なきまに名を和の古野
の山桜、多年の花に移りくし嵐山
を植ゆれ国家世遠にためしかや
是ともも君に恵をあるもの実新りや
こけ山治る世代の長に古かさもぬ
ありや九重のく　内裏の和の世生
樹も西をめくれ日にけ行雲に嵐山戸
激流を落るとこ落も　ちれを乃布る
花の瀧　さり久さ花きき　ぬく
ゆきれ是ゆくを見ハ大和ちれ
ほりて花の陰を清め花をの　新潟
伊の気をみたりとも男八比嵐山佐

人ん　さんは是八比叡山に花寄ちて作　此花
八皆神木ちて人社ふ陰　切清め礼をの
潟伊をうるしは　ちも比嵐山の花の皆
神木なくき　潟をいる　実に不審
八比理り　名を和の古聖の千本に樹を
うり是ハ　昔は人社ちはれ　そ
る寺勝手に神ちに　此面る影向ある
物を　実に　社いちきに嵐
山ちの花の名而ちは何　ちさちの豆
きれう　それうなるも神恵ちを
名を和の花の寄持ちも　歌ちんをの
伊ちに　実新ちやこけ山なに
き治ちるこりは　神風ちるおの
うちなるうう　花の山ちを佐　花ハよも

ちぢに風もまかせて去るの
神ハ新うつり音高や嵐山人をあ
らせ給ひて笙の窟芝松風ハ
相の琴壁ひろく経法の声たて
今ハ昔の山桜夏無しりの水清
く真如芝月ハ澄る世ハ濁れ
足有とも流まな去ぬ何其水と
よりきく其ハ宝をみちて庭ち
の苔を伐も神風ふく吹くきん妄
想芝雲も晴ぬ千年ハ山桜去
閑き嵐の山風ハ吹ども桜ハなくて
此月も光れ行芝よのまをまる世ハ
ちぢ千年もこと此の山桜えくば

雲ちぢ夕陽強き西山や南
のかくる行ほとりく三吉野ハ
千年ハ花の種ちて嵐山ハ
神ハ去ひろ目出きし神楽ひろめて
なき色ハ白雪
の寄勝手芝恵をなる色や松の色
あをねるこ経くに小倉山も見て
なも白ひハ彼御の原下ハ大井河の岩
根ハ活ル芝絶山を見ハ
代ハ千年ハ神楽ひ千年振
神楽の鼓声すきて延続の秋
をひろ歌ス節楽ハ秘曲も廣ウさ
あまな感意肝ハ銘ス折折不思
議や南の方ハ吹く風の異香薫

[illegible]なるの光を光輝を減ず
ハ菩薩権現の垂跡なり和光利物の
[illegible]姿[illegible]我本覚の起を出て分段
同居の塵まぶしきり金胎両部の一足
をとりそけ悪業の宮殿の苦患をた
そけ[illegible]また[illegible]を揚てハ忽
苦界の煩悩を拂ひ悪魔降伏の青
蓮の眼を光明を放りて国土を照し
宮殿を[illegible]を[illegible]勝手義
王権現一体分身同体異名の姿を八を
て各[illegible]山を攀登り[illegible]
[illegible]なるも金峯の光を
輝を千年の[illegible]も[illegible]千本の
桜の[illegible]行[illegible]久しけ

巳

[illegible]けハ左山も[illegible]本尊[illegible]の[illegible]
[illegible]是ハ本宮山[illegible]
[illegible]を[illegible]
都[illegible]本尊[illegible]を[illegible]
[illegible]月もみのをりさしめぬ
[illegible]を[illegible]月を[illegible]
[illegible]なく[illegible]
[illegible]

[illegible]栗津[illegible]
原[illegible]
[illegible]栗津[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

思ひしに、あるゝ有雜や、昔のるれ、なりひ出
らんく、仏不思議なれ是を見て女性を
見れば神に命を泪を流し、祈るゝ
まみてそく、僧ハこたゝゝか事を仰
ひり、さんゞ神を祭り源氏流、祈る
を、ゆ、んそれ、宮ゝ伝をさゝゝな
を、仏ゝき、行教和尚、宇佐ハ幡ゝ
まして、祈り、一首の歌をそく、何事ゝ
ゝ、まひとハ出ゝぬとゝ、かゝきなさゝ源
出ゝまゝとゝ、祈る、所、祈りゝ、神を
ゝれとも、宮れゝ、ゝ、ゝ、社ゝ、影をゝ
ゝ、それより、都男山ゝ、ゝ、ゝ、祈り
国安全をゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、不審
給ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、女性なれ、ゝ、ゝ、里の

都ゝ、ゝ、ゝ、住居とて、名ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、名ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
僧の住所ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
是ハ信濃国木曽ゝ、山家ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、本曽の山家のゝ、ゝ、ゝ、
原ゝ、神の、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
きゝて、ゝ、ゝ、ゝ義仲の、神とゝ、
ゝれゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
名を、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
仏と、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、

他生の縁とおもひ、しばし根をとどめ
しかるに、陸を渡り、海を越へ、
はるばるの旅を、有難き値遇うかな、
有難き値遇うれやさるほどよ、養てゆく
日も山の端へ入、鐘の音、浦波の
波もひきつゝ、いまも拍子き折ふし
かまをも出、若ひ男、其名をいつまで
きゝすへは、星人はとせ、とあつれ、
草ひとたゝるいつたきり、
をゝゝゝ、あゝ、日をへ、夜
みをなりうん、栗津ひ原のあそれ
世をなきうけいつやらもん、
落花をなきを、流れ心なりて
たのたゝるまゝ、ひたすらぬの花を

振も因果ひ若しこ今そうもんに法
の功力、草木国土成仏なれ、況
生あり直道ひ弟ひ、修是ひ、
頼ひ、やゝ、あゝ有難、
な栗津の原ひ草枕ひ見ひ、ありつる
女性なるゝ甲冑を着するゝ、
中ゝに四と、女武者、女ひて、
祇心
強ひ、今あてを、天ひ、
うゝみ、ひを、有徒波の、栗津の汀
ゝ、波のうち、ますあても、
原ゝ、を、女ひて、最期ひすて、
ゝ、ひ、や、恩ひ、
義ひ、ひ、ゝ、ゝ、ゝ

[illegible]期みだんく功名を惜まぬ者
やあるべきとて義仲の信濃を出
させ給ひ八万餘騎の兵に勢をそ
えをちくをちる板波山やくりう
ちほ兵会我おいてを分捕高名せ
かり法ふ地てはこれ法る板
巴のなき世ならまた名を切ばかり
心うれさまとて樹切のもと
きられ引方を法ふ手ち栗津野
落れ雷雷や消給ふ所ハ名ゑ信
回度れ人なれハ頃縁をとをなくや
板せ原の会我まて付と給ひ義仲の
最期をかなりおとをまを須ハむつき
の出なまを雷へすゝ消給ふと只

巴ひとり打をきて弱を出くす地ち
給ふ義仲の涙ぬるけるみちも
言事もあるとゝ流すて打たむ
ゝもなくて半綱まちく縁をとて
ひくかくもなき所の涙なり御を
くひく給ふ出をくる涙まやち
かるゝあたこゝ弱よをて乃
きハ京まハ相ひさまひね事くめき世
ゝを安ち板ハ借ゝをやはり言
ひく巴を供ちをなんちハなるゝ巴
保りをあ彩ゝ是なる寄をハ神を
曾る届きよ貞紀肯りるまを三世の
奉を流をて出く不巻と宮ハ巴は
とをくも涙もをとりあるを

くに前を立ちり見れば敵の大勢あまた見つ女武者にてまずれ[illegible]
と敵まちけるかまそ今八ひとりを
出るまりて一軍始めを見すもも
強くかと敵ハ出くなんと長力
ひおうとあ[illegible]ハ[illegible]敵ハ
えうときつくかれそ力栖もくはり
とのくく四方へまくれハ方抜ハ一所ま
ひるまを[illegible]の繁うて[illegible]光も[illegible]光の陸
波枕をたくひく戦ひをもん皆一方にきり
[illegible]あるを見さりうあ
ども逢みえをうを今八見出ちりと
えうり和君ハ[illegible]ハ[illegible]やはれ
ハ自害ひくはりはまり[illegible]

の程ハ小袖帆巻ちりなむき[illegible]
見なくく結りて[illegible]
はあけともかなりやはりやはね光[illegible]
をいるもんとハ思くはくれく巻ハ遠
言ハ無[illegible]きに業律ハ行ふえうり上
帯切り抱ハ奥心都ま祝ハきなる歩
烏帽ふおちくかとたぬき抜ハ小袖
をひりハき無際点の佩そくみ中老力を
衣ふりうく所ハ言そあるをなる信
無量を本者の里に関と小ハ三ハ
ひとをおちゆきくく初めさ[illegible]
えんをとをてをひ結く概心ハ[illegible]
ひさまく

六浦

ワキ 信濃三人法師 未

思ひやるさく遠なれどこゝ迄も来て桜
ながめよ　詞　是は洛陽東よりいく
たる僧みくにの秋いまだ奥国を見ぬ
なれば此秋名所をたづねくのそこて
り抑此所は武蔵の国の内にて逢坂の関に
相対せるとゝなれば行方を遠ち
水海の海路を渡り山を越いくよ
なくの苔枕あきの月をも星つき
板通岩山を越てこゝ六浦のさとに
ちよきりくに千里に行む一歩よ
も拾こまとろ遠く思ひ道なれば
月をかさねていそぎ行る是はまた
お撫国六浦の里とやいふ此海を

て安房に清澄、寺の中に、みあるに
よりありけなるちいさきくの内に
六海の称名ときやかに唱へ
万たをもとひ、のくに出ぬ山く
の紅葉今を盛とみえ、さかり殊
をきそひ、とくおひ、やうに加へて
かたをみちいまし、又見なる紅葉
の場る本立、餘の本にすれる楓の本
れいう、一葉を紅葉を仕、唯其本立の
如くなれ、謂のなき事にはあらじ、人な
身ねをもとひ、のくに仕侍ふ
を仕はう、さんは見を知より始て
此所一見の僧ふくれう、山これ紅葉
今を盛を見て作る是を楓

乃本一葉も紅葉をしに頂る、ゆ、ん
なるかの人て体ひはよ、ことく
仕侍、とりめくれ、是ハ、ふ、人紅葉
中納言為相卿とかし、人紅葉
見せて、所は、其り話しは、山こ
をみちいまし、あるは、此本一本り
限り紅葉を仕くたくなるう
ねあるおれとりあ、にいかみ、く
このひと、ちはとれ、山はさちこの
庭のもみち葉を、海、話しより、
いまは紅葉を止めて、あ、増り
ろの仕海、中ふ、我数なるぬ為をれた
事向のなりくたるを、ふりち
おこの一本岩、跡を見く、神の時面

そ山はさだなり。わ〻行てとるべし。
手向あれいよく山水の面目をこそ
ゆく〻さて〻さすり唐箱の内の
硯筆はあつ〻しちを今は紅葉を
とめるまに〻それをめなるこゝろん
さきの内硯筆はあつ〻しの時この水
こゝろおもをつ〻かるあれ山里を
くをかゝるねちの場り紙をる
ちてをちをしをそ〻てなる内
硯歌もあつる今は功名を亀て
所退くん是天は道ありとふ古き
とを紙ゝく信今ををちをと
とあつ〻なる常磐樹のこゝなり
是をつきは事のれは水心を

かほとまて古ゝめたる内分を
さてめのちをくまく内ますゝ
今をなるをゝ内もくきるれらの
水は精なりゝお信ゝんとくあ内
をゆくる唯今ゝに春ゝを見およ
ひをある松居しく松ををゝ内
法をとき給ゝかゝねくすゝ紙
みえゝさんと夕のゝもをゝ
苔ちの場の面きりは籬の露
ゝき千種の菊をゝきるけく行
方をゝゝしありはをゝ
所かゝ紙なのゝ称名のゝく法
の考をは所を早更るゝ秋は疾
芝月池濃る庭の面はゝまん拍る面

白やかに有難の仏法成れ
ぬるをちくの縁をひろめ二度
愛を菩提の蓮を開かんと
なよみき成れ月清く庭
乃面をつる女人を松りて
鏡のごとくなる石ゝ草木国土
皆成仏せしめ文を類ひ給へ
をかうたまく天四季折
の草木たしをくの時節得て
色葉さかくの其さを心ゝ
ハ清らかに先青陽のなるれはめ
香ゆなる梅ゝ桜のつゝ咲を
て法人芸心やそなるなるゝ
又を桜の色壁 たゝ雲このを 三吉

野の千本のそれをもなるなと
月日経てうけ春ハ眺めれ
桜のちるし庭の埋さ
御苑の垣ゆ雪ゆ
うりを夏くれ秋も半ゆ成ぬ春
を宴なき松しくれ時ハ
きとみち葉も露時雨を紅ハ
紫ゆゝをくゆ
松くれ山里り 白地ゆる 乾人芸
をそれとのを乃露のなきけるひ
れ法ゝ姿をまれて
をしたちくのえん
きゝ法をさけ
ゝ佛果を得ゝ
月の後程をなり

独をやうさまこ　舞　あきの夜芝
ちよ紅ひとあるかきねても　とんぶ
まて島やなろ海　八幡の名も今
くるくるうねをきこゆる　明くる
の月　所へ古浦の海風　山風吹き
なりくちぬをみち葉の月　そて
そもてかう紅の庭は面あけおい
ぬうしふをあて海る山路を行を
ぬりくを本の月の月に行をそへ
このまの月にけろふまるとなり
みなり

安宅

是ハ加賀國安宅の渡に平安寺と云ハ
ぬを頼ぬ義経ハ兄弟ハ中不和に
なりを給ひ義経ハ都の住居叶ハせ
なりを給ひ十二人ハ伴を山伏となり奥
州秀衡を頼ハ下向のう頼ぬき
うを給ひ國を出る新関とする
山伏をうくえをひとをハ事ハ
をひいる誰ぬあれ今日を山伏達の
ハ通りハをおなるへ山伏　旅の
ちをとすかけの旅の衣を篠懸
の露けき神やきをるらん　関門
なくを屋敷の外は岩根　月も星
の都路のをを思ひやるをうとをを

なれ拙僧のくるる伊勢三郎
義経の沢に片岡益尾常陸房 辯
慶ハ先達の姿となつて立尾ハ
ナニ人いまさなくて拙僧独の薩埵
露命をたすかるくいり迄ハ張り
いとやさく雪の越路の寒さ色く也
時すでに比叡山やく きさらぎの
十日の夜月の光を立出くおもや
此行を海ともゐまくに さるも
さるゐも金堂の山うしろ
寒ハらめきく 法海遠さ行ゐ
く海津の濱よ岩のもとを志めく
よく明行ハ淡海 長浜 高宮 彦根
此の海 宮居久賀 神垣やく 本

芽山 中行 さるよ 見て 寒ハ 松の山人の
虎杖 河水の 水ハ麻生 ハ まハ三国
湊 あの 篠原 波よせて なつかしく
尾花 けしきハ 見ハ 見ハ
きり〳〵 ハ 行 安宅 港 五
そ 先 ハ 屋 心 侍 い
ハ 安宅 みた 新 寿 を
山伏 ハ 是ハ 一 の
の 事 ハ 行 ハ 行 ハ
ハ 法 合 有 ハ 知 ハ 心中
ハ 開 名 何 行 事 ハ
ハ 破 ハ 通 ハ 名 角 を
ハ 花 ハ 是ハ 法
ハ 行 ハ 是 ハ 通 ハ

すなはち先祖等をたのみ奉り
山伏みこ作法何となく世俗に安堵を分
きやうに見せ世話ひとをなぐさ
藤堂を強力にすなる君臣なれども
笈を肩にかけ紙ぶくりにて
引きつりこの通りにて真の強力
とこそ人々見れ天晴さるに
世界を取つたれとあれ
藤堂をえらく強力沙門負さ
る笈なれば肩を知らぬすちの事
みくあるなんぞ異なるようなしさるす
そなたかかれ事なれば必難法も
あれすのみくにて同じ様に異なれや
うと見くあらんく何とぞ

あるべく迎へ沙門きさ者すて
何れにあとより来りしく
ぞとあくすれば言やくれか
ゆえ園生にこそ信者なれ
力みつるも同をけとに藤堂を抜
くく麻の衣にあるまじ
強力に負ふる笈を戦場にて肩
まけ笈の上なる両皮形名を
きて綾錦をみく顔をかくし
堂剛なるもの是ぞ
みてよろくくとくとこそ
ていきいる客信用に是
も紅東大寺大仏再興の為国をめぐり
勧をきたる沙門道をは甘堂にて一

紙半銭をえらびすめ勧進聖
みえに勧をほどこす中に事勧を
あへ寄りて但山開を限つく山伏
をとめに其謂なく強りくきを
ゆるす扨も頼朝義経ほどの中
不和なるを法ひ義経は都の住居
なるを法ひ十二人の供り山伏を
なり実名秀衡を形をほど向のよう
頼朝同名及を法ひ国ふ彩英
をすと山伏かくえらびとの
事をて行る一人を通りまち
くに暫れよりの作はさるの供
る山伏をとて捕ることは作あるべく
如報の如きの城の山伏をもほどめ

ほきうあくそれら判官殿ほ国者
を無益ところに通りは
をてつまるもとめてを講ほ
きう中に事あ、粗忽のほ
ひくほ後悔ほ立腹国ほ
不至なる所く寄りわひくいをめう
なさあるに宮勤のほをめて
寄をるきるもうするてほ
覚悟なくいるほにあるに景紀
の勤めをして寄常にきられるす
をてが所を法りほ心動る
ほ勤免く是て破国をうするて
大山伏をいりて後の僧婆塞のか
儀を受け其外不勤明を法容を

くるまと　頭巾と　いかゐ智は寶冠
なと　十二因縁のしるしとして　鄭き
九會曼陀羅の柿色袈裟　胎藏界
色の腰巾をとき　胡文八月は草鞋ハ
八葉は蓮花を　まくなと　出へ長
を河叶の二字を唱へ　即身即佛は
山伏を　宮みくらちもの法ゐ
明王の　無流　ちりかくう　熊野
權現　芝居　罰をあらんと　たち前
ゑいくく　うちひあくかくし
唵阿毘羅吽佉　珠数　さくくと
かくうん　近江つとの　珠勝
は　只今のりは　南妙法蓮華経の
由伊ゆとの事を　勸進　座の
中くは事　讀て　國をかさう　其府後は中
よりも　奉拍一先　取出　勸進帳と名
はをつ　高くかるそ　讀と　をも　とに　それ
熟　性も　大恩教主の　秋は　月へ　涅槃
の雲は　流を　生死も　取乃　ありき　ゆ　色
　　なく　　
　　
　　

くハ志ん蓮もの上ハ世をん改命
施主敬白ぬと　天もひきと淡ふろう
奥芝人と後世消　星おそきをもく
ゑ　ゑもく　色そ仏通りゆく
やあ仏の強力とまれとして　嘉芝ハ秋君
城あや　そるハ一期の浮沉松りぬと
皆一回を立ゆる　あ、仏ゆて事を仕損
きれ　やあ仏の強力なるとて　ゑ　ぬう
強力をゑ　ふなるとりとめて　甚渭
を仏　ちと人をれるとと者のい祇
みるくい　人り人を仏ゑりゑ不審
りいうさて誰を仏ていそ　お皮
殿り仏なとと者れん強止ゑ
判官殿を仏なる強力ぬ日和れ

てゑれ　膳ゑや日高くハ能を図ゆて
ちゑ　ゑる　僅なる筋負て　あとり
きゑれ　ゑて人をあや　もれ　ゑほと
みりて　くと思ひちゑ　いてゑの
刀をてゑれんとて　金剛杖を逆え
てゑんくゑ打擲す　たくとゆて
いや　急ゑるくゑとり　ゆまくい
強力をとゑめ　筋ゑゑろを懸法ハ
盗人ゑゑ　ゑれ　ゑくい何敵ゑ　の祇
いゑ　き強力を左力ゑれを抜法ハ
めゑれ　ほのゑるまひ　聽病れ通りを
十人芝　山伏ハ打刀抜ゑけ　くいゑ
ゑる有様ハゑる所天魔鬼神をはゑ
れつゑ　ゑで　ゑ　ゑ　近以　法を

ゆてはどうく道理作くに今の
當座をのゝしきたりことに
つきなる振舞ゆゑ中〳〵おろ
かゝれとやもしくるきの
ゆ果報ゆゑなりとて無芸の
松もあるゝ世なりつゝ
まうゝたへ
悪敵も心ゝのれ唯今の桃精
ゑ元寿のなすあるゝに天ゆ
加護ゝて光明の光をもれを
あやめ生涯ゆなりつゝ前ゝ
の是ゆはんたりて唯寒の家人
のゝく敵ゝ和をたゝ
是無慶ゝたりゝゝあるすハ幡

ゆ法寿ゝ心ゝ
天世ハ夢ゝ
ゆ地ゝ
ゆ飛今ゝ
ゆ敷ゝ天罰ゝ
事ゆ宝ゝ現在の果ゝ
ゝ去事果ゝ
て光ゝ月ゝ
十日の今日芸能ゝ
きゝ唯ゝ十姫人夢乃
ゝ心ゝ面ゝ
ゝ法ゝ
経ゝ馬の家ゝ生ゝ来ゝ今ゝ頼
朝ゝ髄ゝ西海ゝ流ゝ山聖
海岸ゝ

枕片敷傳もあるこのくあるは八ハ紅ゑ
ひ風波を分を仕を或とちハ山脊の
馬蹄そ見ぬ雲の中を海そう
あるタ浜のえくるあや須戸の名のと
くこ三と世の行もなく敵をこ
ひく世の其忠勤を法をなるをそ
北方のそも何といくら因果をや宮
思ふ叶とねハこそ浮世をれと老
老花さそうすをひくをハ棒引て直成
人を苦こて恋ハ八増の世を有
て遠を東南芸雲をおく西北の
雪霜をせめくれ愛方を理を
法をくきなるて性芸ハ神を仏を
ち世をねや恨めの浮世やあ

恋めの浮世やいくあるこ今の
客信達ハいくこ正出あるうを
急き迫つきをめ山くを方とも世
只てそ粗忽なる老のひくを
をあきをとて祖に南蛮の名酒薬の
酒をおくこ下きくこ見とく
と名酒をこ責下なくをするそ
ひ人の情に至ふけて心をえんとや色
つけそくくるを心なくれうくれとう
あ中めくまなを面くと羅紗を達あく
まて北山陰の人をとりにさくると
因居くこ石も山法の蔵に酒を飲ふ
面白や山水をくを垂をくくてく
流をくくを曲水の手先座る神とれて

[illegible]を[illegible]よ切よう無[illegible]を三
塔の遊僧[illegible]延[illegible]の時[illegible]和歌[illegible]れ
ある山水の落て叢[illegible]ひ[illegible]
鳴ハ瀧の[illegible]先を[illegible]
咯ハ滝の[illegible]ある八瀧の水表月ハ照[illegible]
[illegible]
[illegible]

をとせ人家長久のことをこそ願はなるも久かるべき天皇崩御の時代なれば用ることかりけを無義の二柱の社の松もさそれ四所のくに神の代よりの事なれば水屋のことは遠き事なれば神意こそのものもなる枝をあらはすなれ時やはくやはは明恵上人まことに度々のうしはは事なるなれば神意をえん許なるべき所事なるべきなれば今の世事なるべきなれば唯今事ること他の働なるべしこれは唐渡天の心なるべしなるべきなれば是はなるべきなれ

なる所作なれば佛在世の時なるべしなれば見聞の益をなるべしなれば今の世の宮寺なれば則是鷲山なるべきなれば其上聖人なる左右と牧を笠置の解脱上人を次郎とたのみ両眼左右手の如くなる思召晝夜名案をんの擁護なる意みなるべしなれば怒と思召なるべしなれば是は四海をすべへ唐渡天の思召なるべしなれば唯今すべし神意なるべしなれば唯今日と侍り者まく作へさる正事なるべしなれば唐渡天の心さこそ佛法を擁まん為なれいそ神意なるべきなれば是程なるもなれば